
輝きの戦士たち

神名 心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輝きの戦士たち

【Nコード】

N9306X

【作者名】

神名 心

【あらすじ】

少年アレクは母の病を治すために旅立つことを決意する。強い運命の計らいによって世界を舞台とする闘争に巻き込まれていく。ファンタジー巨編ついに開幕！！毎夜10時更新！！お楽しみに！！

木に登れない少年

秘薬があれば……。

あの秘薬があれば……。

闇の中で蠢く人間のようない物体。人の形をしていたものが大
小を繰り返し、やがて螺旋の紐に形を変え暗闇の一点に吸い込まれ
ていった。その入滅が終わった瞬間、黒かった世界は緑に色を変じ
さらに爆発するように広がったかと思うと、そこには丸い球体、石
榴の実のようなみずみずしい赤さをもったものが生まれた。続いて
白い目のようなものがその球体に二つ浮かんだ。白い楕円の中から
ぼんやりと黒い点が出現する。毒々しい表情だ。目のみだったが、
たしかにそう思える何かがあった。

愚かなるは光。我を閉じ込めたのは輝きの四戦士。憎い。実に憎
い。

我は閉じ込められたといえども、そのものを呪う力はある。
ふふふ。いや、やつらの子孫代々にわたって苦しめてやろう。
くくく。そして我が復活した時に奴らを従え世界を征服してやる
う。

人間たちを支配し、この世の地獄をみせてやろう。

悪に魅せられし、同胞よ。集え。闇を抱えた人間よ。集え。

月日は伝説の時代より遙かに流れ平和な日々が多くの人々に享受
されていた。

ここは大陸の南端にあるランデッサという町。ランデッサとは古い
言葉で「輝ける町」という意味である。この町は、かつてこの世界

を滅ぼそうとした邪神から世界を守った者が仲間とともに開いたと云い伝えられている。それが正確にはどのくらい昔か、そして、その子孫は今どうなっているのかはあまりにも長い時間が経ち過ぎたため、最早この町の人々には忘れ去られてしまった。

南には広大な海が存在していた。あまりの波の激しさに漁をすることは困難だった。北西にはブナの大森林が大地を埋め尽くしていた。町の東には広大な農地があり、みな芋やニンジン様々な野菜、米などを作って暮らしていた。

そのため、一部の者を除いて昼過ぎには大人たちは皆働きに出て、町は子供たちの独壇場になるのであった。町外れの森で少年たちが戯れている。いや、その表現を使うにはいささか不穏当な気配である。

「やーい、弱虫アレク」

木の上にいる、ニキビ面の少年が枝になっっている実をむしり取った。彼は手に取った硬い実を下に向かって投げつける。実はアレクの肩に当たって地面に落ちた。よくみると木には数人の子供たちが登っていて、にやにやしながら見下ろしている。アレクは自分の頭に降り注ぐ実にじっとたえていた。

「悔しかったら登ってみろ」

「腰抜け」

今度は言葉の攻撃だ。様々な罵詈雑言が降ってくる。

アレクには登りたくても、登れないわけがあった。

昔、木に登っていたところ誤って落ちてしまったのだ。命にかかわる重症ではなかったが、右足を怪我してしまったのだ。命にかかわる重症ではなかったが、右足を怪我してしまったのだ。

木登りごっこに入れない失意のアレクはそつと悪口に背を向けて家のほうに向かって歩き始める。途中で別の木を見つけて登ってみようと試みるが、右足がすくんだ。母からも「もう2度と木には登らないと約束してちょうだい」と強く懇願されていたのを思い出した。どちらの理由によってかはわからないが、おそらく両方の理由によって、アレクは今日も木に登れなかった。

ふとアレクの胸をうつすらと冷たい風が吹きぬけた。とたんにアレクは悲しい気持ちになった。

昔、授業で習った英雄ベルグブルク。彼のように僕も森を飛び回りたい。あのムササビ農夫の異名をもつ男のように領主を捕まえてやつつけるのだ。みんなに尊敬される人間になりたい。いっぱい母にも樂をさせてあげられるのに……。でも、子供の僕にはそんな力はない。

アレクは子供特有の夢想で頭がいっぱいだった。

実際の史実では、ベルグブルクの両親は領主の親衛隊によって処刑されている。もちろん大人たちは子供にそこまで教えることはしなかった。

気弱なアレクは常に見下され、いじめられていた。それが現実だった。

学校にて

そんな毎日が過ぎていったある日。レンガで作られた赤茶色の立派な校舎では数十人の子供たちが授業を受けていた。

教壇には教師が唇をしかめて立っている。袖なしの赤い服を着ていた。さすがに寒い季節の今、袖なしはおかしらしく、生徒のからかいの対象になっていた。教師は陰口を知っていたのだろうか。生徒に厳しく体罰をことあるごとに繰り返していた。この日も、生徒たちが私語をしていたのを怒りの形相でにらみつけた。そしてアレクを呼びつけると教鞭でピシッと叩く。アレクは

「どうして僕が……」

と言ったが、教師は

「学級長だろう、代表責任だ」

と言うのみだった。彼がいじわる集団の投票によって学級長にされたばかりでなく、彼には立場の弱い母しかいなかったためだ。他の生徒に体罰でもしようものなら親にどなりこまれるだろう。

だが、アレクのことなど知るか、とばかりにニキビ面の少年が大声で相方のおかつぱ頭と話し始める。

これには教師も閉口した。どうすればいいだろうかとしばらく思案していたようだが、なんとアレクに二人を「叩いてこい」と言い出した。しかし、アレクには叩けなかった。頭の良い彼には母が迷惑をこうむることが目にみえていたからだ。生徒に体罰を代行させるとのが素晴らしい案と思っていた教師は怒り命令に従わないアレクの腕をひどく赤くなるまで叩いた。

アレクの母は雇われ農婦だった。雨の日も風の日も仕事があれば出かけていき、ぼろぼろに疲れ果てても、わずかばかりの貯えとパン代が手に入るくらいだった。大農家にも雇われていた。だからアレクはその息子たちにいじめられても何もいえなかった。もっとも

元々気立ての優しい子で、やり返そうなどと考えるはずもなかったのだが。

この日もじつと腕の痛みをこらえながら家路につき、遅くに帰ってくるだろう母に腕をみせないようにずっと腕を冷やしていた。しかし、アレクの今日の災難はこれだけではなかった。

母の病

母が農作業中に倒れたのだ。アレクは数人の村人が母を無造作に運びこむのを心配そうにみていた。

雇い主の男は

「これで母さんをみせてやるといい。お前の母さんは良く働いてくれたよ。もっとも鈍くさくて、他の雇い農夫から同じ給料をもらうのが不公平だつて抗議されて、こつちも大変だったからな。明日からはもうこなくていいよ。ゆっくり養生するといい。ふん」

といって、とても医者を呼べないような、はした金を渡した。母が必死で稼いだお金だった。わずかでも無駄にするわけにはいかなかった。

「ありがとうございます。……」

重かった。このお金は重かった。そして母の病状もアレクが思ったよりずっと重かった。

「母さん。母さん。しっかりしてよ」

次の日からアレクは学校にも行かずに、つきつきりで必死に看病したが母の病状はいつこうによくならなかった。母の体は氷のように冷たかった。川に水をくみに行つて沸かしたお湯につけた手ぬぐいで体をふいてあげるのが毎日の日課だった。

「あの人伝染病じゃないの。また同情を誘おうつていうのかしら」
そんなあらぬ噂が町の心無い人たちによつて流された。

これはアレクの母が人並み以上に美人だったからに他ならない。若いころは村一番の美人といわれ、伝統的なランデッサと隣町ゲルドクルで開かれる祭の踊り子にも選ばれたほどだった。そんな彼女がある日お腹を膨らませたのだから、当時の大人たちの落胆や憤りは激しかった。彼らは何とか彼女に父親と結婚させようとした。しかし、ついに誰の子か口をわることなくアレクを産んだ。そんな事情もあつて嫉妬や、やっかみが幾分人々の口には火をつけたのだ。

そんな様子を見かねた町長に頼まれた医者がある日やってきた。

彼は白衣を着ていて、アレクの住んでいるみすばらしい家を見て自慢の服が汚れるのを嫌ったが、他ならぬ町長の頼みなのでと冷たい目でアレクを見ると、ずかずかと家に入ってきた。

「私は医者 of ベルダンディだ。いやどうもアレクくんっていうのだね。これから君のお母さんを見てあげよう。めったにないことだよ。無償で診るなんて、感謝したまえ。うん。何しろガルシャ・アルメイラ出身の医者なんてめったにいないのだよ。君」

アレクは医者と聞いてただただ恐縮して、ガルシャ・アルメイラの素晴らしい医術で母親が治るかもしれないと希望を抱いた。医者は一人母の眠る寝室に入ると診察を始めたらしかった。

しばらくした後、医者は出てきた。非常に重苦しい顔で……。

「単刀直入に言おうアレクくん。君のお母さんは非常に珍しい病だ。恐らく眠り病という病だ。私は専門医ではないのでこれ以上はわからない。まあ、このことは口外無用に頼むよ」

と、アレクの小さな手に何かを握らせる。5ゼルト硬貨だった。

アレクはきょとん、として訊ねた。

「なんですか？これは」

「なんですかって、君。私が患者を治せなかったと評判が立つのはよろしくないのだよ。まあその金でせめてゆっくり看取ってあげるのだね」

医者は戸を開けて帰ろうとすると、アレクは後ろから必死にしがみつく。

「先生。看取るってどういうことですか。母は……。母は死ぬのですか。治す方法はないのですか」

アレクの汚れた手で白衣を触られたベルダンディは真っ青になって「わかった。わかった。教えてやるからその手を離しなさい」

と言う。アレクは冷静になって、医者の衣服から手を離すと「すいませんでした」

と小さな声で言う。医者は演説をする前のように軽く白衣を整え

ると、話し始めた。

「いいかい。アレク君。眠り病については、我々は必死になってそれを日夜研究している。あのガルシャ・アルメイラでだ。わかるね。うん。そうだ。あの医療都市でだよ。思えば、そうこの地から魔法の伝統が失われて数百年、科学の力によつて我々はこのまでの恩恵を手にしたのだ。ん？要点だけを言え？注文の多い子だな。つまり、ガルシャ・アルメイラに行けば何かわかるかもしれないということさ」

「そんな、もしかしたら治せないかもしれないのですか？母はどれくらいもつのですか？」

「わからん。だが、もつて、そうだな。数ヶ月といったところだろう。だが、行つてみる価値はあるかもしれないな。君。じゃあ、私は失礼するよ。お大事に」

と冷たく言い、家を出て行つた。

旅たち

しかしアレクには一筋の希望が見えた。たった一人の肉親を亡くすか亡くさないかという瀬戸際で少年はそれにすがった。そして、驚くべき行動に出たのだ。

次の日アレクは悪名高い町の高利貸しのビヨル・ミーチを訪ねた。

この男は金貸しという理由でやはり村人から軽蔑の目でみられていた。そんな境遇が似ていることも手伝ってか、不思議とアレク親子には優しくなった気がした。もっともミーチに言わせれば、この町の人びとを自分の客としかみていなかったからである。そしてアレク親子はそれなりにいい客になりうると考えていたからだ。というのもアレクの母ランラヒルムは貧しいながらも家と土地の所有者だったからである。いずれアレクに相続させるために必死になって歯を喰いしばって、それだけは守り抜いてきたのだった。アレクによくその夢を語って聞かせたものだった。

室内は薄暗く、怪しい雰囲気が漂っていた。アレクが来たのをみると、ミーチはにんまりとして大人をもてなすように椅子を勧める。「ようこそ。アレクさん。これは、これはいったいどういった用件ですかい」

と愛想よく話かける。アレクは率直に切り出した。

「ミーチさん。ここにきたのはお金を貸して欲しいからです」

「待っていましたよ。アレクさん。実はあそこの土地を買いたいというお客様がいっぱい、いらっしゃるのですよ」

ミーチは満面の笑みをさらに大きくすると、まるで化け物のように笑った。アレクはぞっとしたが、悪魔に魂を売ってもかまわないという決意を抱いていたので、承諾した。

「家も土地も売ってしまってもいいです。旅のお金がほしいのです」
母は悲しむだろうが、アレクにとって家や土地などは母の命に比

べればどうでもよかった。

「いいでしょう。アレクさん。お母様はかしどうなさるので？」

「母は……」

アレクは迷った。母はあなたの家に置いていただけませんか、と
いたかつたが、心配だった。信頼できる大人もない。そうだ！
「ミーチさん。母が生きている間、家はそのまま置いてくれませんか」

「アレクさん。それは無茶ですよ。看病は誰がするのです」

アレクはそこでミーチに病のことを話した。半信半疑だった金貸
しは何やらずるがしこいことを思いついた。そういえば、遠くの町
に病の研究をしている変な成金の爺さんがいたな。あの爺さんに母
親が本当に呪いにかかっているならば高く売れるかもしれんな。

もしそうでなくて、死んでもこっちはまったく損はしない。いい
取引だ。

「ようござんす。アレクさん。お望みのままに」

ミーチは何やら紙に万年筆で書きあげると奥の棚の引き出しから
ナイフをゆっくり取り出すと、薄気味悪く笑みを浮かべアレクの前
にゴトンと置いた。そして、人差し指でどこに判を押すか指し示す
と、どつかりと腰を丈夫そうな椅子に下ろした。アレクはこの男を
信じていたわけではなかった。この悪名高い男が子供のアレク相手
にまともな商売をするはずがなかったからである。相場の半分だろ
うか、4分の1だろうか、わからなかったが、鋭いナイフで指先を
少し傷つけると出てきた血で判を押した。お金と引き換えに。

翌日アレクは町で旅道具を買って準備した。旅たちのときはきた
のだ。北に向かうミルベニア街道をアレクは出発した。ゲルドクル
から来ていた旅の商人にお金を払って荷馬車に乗せてもらったのだ。
ガタゴト、ガタゴトと荷馬車は出発した。アレクの旅は始まった。
(母さん待っていてね……)

そう思いながらアレクは故郷のランデッサが見えなくなるまで、じ

っ
と
見
つ
め
て
い
た
。

アルバジルの話

街道の途中、なだらかな坂の上になると『盗賊注意』と書かれた木製の古い看板がちらほらと目に入ってくる。アレクは心配になっておじさんに聞くと、めったなことでは出ないから大丈夫だよ、と言ってくれた。初めての旅で少し興奮気味に話すアレクをおじさんは優しく接してくれた。

「わしにもお前さんと同じくらいの年の子がいてなあ。わしが行商に行こうとすると連れて行って連れてくれとねだったものだ。そうだ。ムササビ農夫、ベルグブルクほど有名ではないが、このミルベニア街道に伝わる話を聞かせてあげよう。昔、そう。それもずいぶん昔の話だったがなあ。行商人アルバジルというものがいてなあ。早くに妻に先立たれてなあ。三人の子供と一緒に行商の旅をしていたのだそう。それが、運悪く盗賊に出会ってしまったてなあ。相手は十人ほどいたと伝えられているのだがね。そのときアルバジルは自らの商品を守るために子供を誘拐犯に差し出したといわれているのだよ。なぜなら、そこにはゲルドクルの町で年に一回ある祭り、そうラルー祭に必要なものの黄金の女神像があったからなのだよ。その商人の心意気にいたく感動した町の領主様、昔は領主様がいたのだよ。そうそう、そしてその領主様が兵を送って盗賊を滅ぼしアルバジルの子供たちを助けた。というのが話だ。」

「おじさんは盗賊が来たら僕を差し出すの？」

アレクは不安に思っただけで聞いた。手をもじもじと動かしている。おじさんは一瞬、キョトンとしていたが大声で笑って言った。

「そんなことするはずないじゃないか。心配するものじゃないよ」

アレクはほっとして、だんだん眠くなってきた。あくびを2、3回繰り返して、なんとか我慢しようとするが荷台に寝転がると、眠りこけてしまった。

夢うつつの中で母親の夢を見たかったに違いない。アレクはまだ

幼いのだ。

「ぼうや、よいこだ、ねんねしな、地獄の果てまで、追ってくる悪魔から逃げて、いつまでもいきてゆけ」

母の子守唄が聞こえてくる。ランデッサに伝わる唄。続きはなんだったろうか。忘れてしまったのだろうか。聞きたかったが、聞けはしない。代わりに世界は重力を失い歪曲したかと思うと、今度は暗い一室を映し出す。ここはどこだろう。アレクは不思議と知らないところでない気がした。室内には象牙で装飾された金の椅子がきらきらと輝きを放っている。誰かがそこには座している。誰だろう。アレクは暗がりにも目が慣れるまでじっと待っていたが、いつまでもその人物の顔は見えなかった。今度は一歩進もうとすると何故か、椅子は遠ざかる。「あなたは誰ですか」アレクは何故かその人に訊ねていた。機械的な声が「アレクか」と言った気がした。何か懐かしいにおいがした。そして再び椅子は遠ざかっていた。

ハッ。アレクは目を覚ました。もう夕闇が辺りを包んでいた。おじさんが起きたアレクを見て「おはようさん」と笑顔でいってくれた。アレクも挨拶を返す。それにしても不思議な夢だった。目が覚めた今でも妙にはつきりと覚えている。だが、それよりも母を思い出した。「母さん……」アレクはこっさりつぶやいた。泣くわけにはいかなかった。泣いて楽になるかもしれないが、母は良くアレクが泣いていたときに「泣いてすむわけではないわよ」といつも言い聞かせていた。だからアレクはじっと我慢した。母の涙だって見たことはない。そんな強い母なのだ。

盗賊

「さあ。もうすぐゲルドクルだよ。ぼうや疲れたろう。宿はどうするのだい」

行商人のおじさんはアレクを思いやるように言った。

「僕は節約のため野宿でもしようかと思っています」

「それはいけない。あそこは危険な町だよ。特に子供にとって」

そんな時ふいに荷馬車の周りに人影が見えた。誰だろう。そうアレクが思っていると、へんてこな頭巾をかぶった小さな群れはあつという間に馬の前に立ちふさがると、その中の比較的背の高い一人が低い声で言った。

「俺たちは無法子供集団インジグ・インジグだ。おとなしく金目のものを渡せ」

おじさんは子供の盗賊ごつことでも思ったのか、平然として大きな声で怒鳴りつける。

「おい。お前たち。ふざけるのもいいかげんにしろ。わしは怒るぞ。どくんだ」

と言った。リーダーらしきさっきの少年は腰元からナイフを抜くとあつという間に行商人に投げつける。

ひひーん。馬が暴れた。ナイフは馬の脇をかすめておじさんの股の近くの荷車に突き刺さった。

「ヒイヒイ」

相手が本気だと知ったのか、おじさんは脅えはじめた。目はあきらかに恐怖に凍りついている。アレクも怖くて成り行きをずっと見ているだけだった。

オロオロオロオロオロ。突然子供たちはみなナイフを抜き奇妙な声を出すと荷物に向かってきた。行商人は荷車の御者台から転げ落ちるようにして、ゲルドクルの町のほうへ逃げていった。子供盗賊の一人がアレクを見つけて

「おい。ここに小僧がいるぞ。ん？なんだ。あのおっさんの子供じゃないよな。似ても似つかないものな。こんな年で一人旅か？どういった事情だ。俺は無法な盗賊トッテル様だ。頭目インジータの片腕さ」

「おい。トッテル。何をしてる。その子供もとりあえず、さらっていくぞ」

赤い頭巾の中から凜とした目でこちらを見るリーダーのインジータがトッテルに声をかける。あたりに気を配ることも忘れずにあたりをキョロキョロしている。その視界の先には夜を迎える直前の森の不気味な様があり、動くものはない。トッテルは両手を上に上げて了解のポーズを作ると

「おい。逃げようとするんじゃないぞ。ひどい目にあうからな」

と怖い顔で言ったが、その後におどけて

「まあ。俺からインジータに悪いようにしないように取り計らってやるって」

とアレクの背中を軽く励ますように叩いた後、笑った。無言で荷物を調べている子供もいる。どうやらそれぞれ役割が決まっているらしい。少し太めの子供は、何やら帳簿のようなものに書き留めている。内容は荷物を調べている者たちが交互に「唐辛子1、2、3、……」などと声をあげているのをメモしているらしい。時折指で数えている幼い子供もいるらしかった。他の者は周りにいて荷馬車を取り囲むように辺りを警戒している。

「終わったよ。インジータ」

と太めの子が言うと

「トッテル。目隠し……」

と声を張り上げる。声はトッテルの耳に入って、その手はアレクに厚い布ですばやく目隠しした。

そして一行は出発し、夜の闇にまぎれてどこかへ向かった。

ミシユリアーゼ

盗賊が出た!!!

行商人仲間たちが、その知らせを受けてすぐに棍棒や剣それに明かりを持って、現場へ向かった。しかし、そこにはすでにわずかに人の足跡が残るのみだった。

「おい。この小さな足音見ろよ。どうやら盗賊たちが子供つていうのは本当らしいな。まったく子供相手に脅かされて、荷物を置いて逃げてくるとは行商人アルバジルの爪の垢のませたいぜ」

「おいおい。でも、あいつらが最近、アルデー又あたりで有名な子供盗賊じゃないのか。インジゴ・インジラだっけ？名乗ったそうじゃないか」

「ばかやろう。インジグ・インジダだろうが。インジグは古い言葉で梟つて意味だろうな。盗賊の守り神さ」

「いけねえ。俺も年だな」

「とりあえず今日のところは暗いし帰ったほうがよさそうだな」

「そうだな」

口々に同意の声。皆それぞれ明日の商売もあるのだ。

町の評議会でこのことが話あわれることになった。

豪華な内装がちりばめられた一室には窓があり、その窓から日が射し込んでいる。日は床に長方形の窓を縮めたような形をつくる。

そのすぐそばに琥珀色の椅子に座る口髭をたくわえた中年。木の葉のような紋様が描かれている襟のない服をきている。男は指で机をこつこつと、苛立って叩いて言う。

「遅い。遅いぞ。約束の時間をもう5分過ぎているというのに」

「さ、さようでございますな」

入り口側の椅子に座っていた老人はびくびくしながら答える。

「まあいい。仔細を話してみよ。組合長」

「はあ……。しかし、司祭様がお見えになられていないようですが」「かまわん。すでに、我がミシユリアーゼ財閥は兵の派遣を決めている。問題は教会側が参加するかしないかということだ」

ちようど、そこまで話終えたとき、若い青年が入ってきた。赤い髪。碧眼。優しい表情をしている。老人に

「よろしく。シルバです。行商人の組合長さんですね。お待ちせしました」

と深く一礼すると「グロッサ様も」と付け加えて軽く会釈して笑顔で中年に挨拶すると

「さて、盗賊がでたとか？」

と組合長に聞く。老人は昨日の出来事をたどとしく話す。話の主導権を握られたグロッサは面白くない顔をして聞きいつている。そして話が終わると老人を部屋の外に送り出す。そして、再び椅子に座ると一言ぽつりと

「教会は武装枢機卿を出します」

「なんだと！――！」

これに驚いたのはグロッサ。

「ミシユリアーゼ家の当主ともあろう方が、何を動じておられる」と青年は、諭すように言った。しかし、グロッサの動揺は大きかった。

「この町に武装教徒を入れるときは一言ほしいといったはずだぞ」

「緊急の事につき、ご容赦願いたい」

「緊急だと？ いったい何があったんだ。盗賊くらい我が私兵でなんとでもなるわ」

「子供盗賊なんぞに我々も興味はありません。問題はその頭目です。すでに枢機卿様が追っておられたのですが、見失ったようでして、人の口には戸が立てられぬと申しますか、うわさを聞いて、急遽こちらにお越しになりました」

「頭目といっても子供だろうに。いったいぜんたい何故武装枢機卿が来るんだ」

「はい。どうやらその少年、魔法を使うらしいです」

「……まさか、『覚醒者』なのか？手品ではないのか」

「わかりません。まあ、念には念をとということで財閥の兵もお願いしますよ」

こうして二人の話は終わった。

盗賊の家

一方、アレクは不法子供集団の住処に連れてこられていた。森の奥深くのようだ。ひんやり冷たい空気。そして、一見それとわからないような蔦に覆われた家。子供たちはここを家と呼んで暮らしているらしかった。暖かいスープがそこではふるまわれた。もちろんアレクにも。ここには故郷の大人たちの世界にはなかった珍しい品々が所狭しと並んでいた。鷹を模った長いパイプ。長方形の形をした砂時計。……

「今日は上出来だ。さて、捕まえた小僧は食い終わったら、俺の部屋に來い。みっちり取り調べをしてやるからな」

と悪戯っぽい顔でインジダが言うと、みんなが一斉に笑った。

アレクはまだ怖くて、びくびくしていた。インジダという男は浅黒い肌をした、アレクの3、4歳年上くらいにみえた。圧倒的な存在をもつて、仲間たちに信頼と畏怖されているようだった。アレクはトツテルにつき添われてインジダのところへ向かった。

部屋に入ると驚く程質素な部屋で、紙と机とベッド以外は特に目を引くものはなかった。

「それで、お前は何故あの馬車に乗っていたんだ」

インジダは言葉遣いとは裏腹に優しく問いかける。アレクは空腹を満たされて安心したのも手伝って、ついに話し始めた。

「僕は母さんを助けるために……」

アレクはぼつりぼつりと続ける。インジダはふんふんと聞いていたが、母親を置いてきたあたりに話がいくと、少し寂しげ表情をした。

「よし。そうか。なら明日ゲルドクルの町まで行くから、そこまでは送ってやる。ただし、そっからは自分でなんとかするんだな」

「ありがとうございます。インジダさん」

アレクは礼をいうとぺこりと頭を下げた。

「インジードでいいぞ。それに俺らは盗賊だからな、礼を言われる筋合いはない。おいトッテル。今日は客人だ。あつたかい羽毛布団を持ってきてくれ。俺の部屋のベッドで寝かせてやる」

両手を上げるとトッテルは部屋を出て行って、すぐに戻ってきた。手にはあつたかそうな掛け布団が載っていた。

「おい。坊や。こいつで今日は天国行きだぜ」

と齒をみせる。

「じゃあ、もう遅いからな。おやすみ」

といって、インジードは部屋の明かりを消すと、真っ暗になった。

「おやすみなさい……」

少し心細そうな、アレクにトッテルが寄ってきて「しょうがない一緒に寝てやるよ」とばかりに、布団にもぐりこんでくる。出て行くとするインジードに

「おい、俺もこっちで寝るぜ」

と告げると布団を頭までかぶった。インジードは小声で「好きにしろ」とつぶやくと足早に部屋を出ていった。

トッテルはなかなか眠れないアレクに様々な今までの武勇伝を語って聞かせるのだった。しばらくすると、いつの間にかアレクは眠りに落ちていた。

ケイト・ミシュリアーゼ

ケイトという名前は好きだったが、ミシュリアーゼ家は嫌いだった。明るい未来、何不自由ない生活、優れた家庭教師、すべて彼女には色あせてみえていた。窓の下の路上をせわしく歩き回る野良猫がうらやましかった。

（ああ……。私はなんて不幸なのかしら。こうして休憩時間も屋敷から一步も出られないなんて……。お父様は何に怯えていらっしやるのかしら。私だって、年頃の子供たちと遊びたいのに）

ケイトは最近流行のルービックキューブを一人寂しく、いじっている。

（そういえば子供盗賊が出たと家庭教師が行っていた。どんな人たちだろう。きっと、とんでもなく自由に違うわ。どうにかして抜け出す方法はないだろうか。世界の壁を今ぶちやぶるのよ。待ってなさい、世界）

やってくる。圧倒的悪意がやってくる。

親方はいつも兄弟子をひいきして俺にはまったく目もかけてくれない。技術ではまったく俺のほうが勝っているのに……。不満だ。不満だ。男はこんな考えに取りつかれていた。

ニクイ。ニクイ。カガヤキノヨンセンシノマツエイドモ。

男の頭にこんな声が響いてきたのは、およそ3週間前だった。そのときはちょうど、家で家族と食事をしていた。何気なく空耳だろうと思って気にせずに過ごしていた。だが、段々とその声は大きく頻繁になっている。それと同時に男の体にも異変がおこっていた。夢遊病者のように夜起きて、叫んでいると家族は迷惑顔で言う。何でもカガヤキノセンシだとか何とかの悪口をずっと言い続けているらしい。石工の仕事をしている男はノミをもって、今日も不満

げに働いていた。親方と兄弟子はでかけていて一人での作業だった。すると、そこに一台の馬車を通りかかる。木の葉紋様が見える。ミシュリアーゼ家のものだ。車内はカーテンがひかれ、うかがい知ることはできなかった。男は、ぼーっと眺めていた。そのとき、ひょこつと小さな女の子がカーテンの隙間から顔を出した。その姿が男の脳裏に焼きついた瞬間、また声がした。

ニクイ、ニクイ、ニクイ。

男はしらずしらずにノミを放り投げ走り出していた。普段の男からは考えられない、とんでもない速さで。馬車にあつという間にたどりつくと男だったものは、鍵の掛かった馬車のドアを力づくで、メリメリと開けていく。人の力ではない。異変に気づいた御者が「あつ」と叫ぶと急いで男を馬車から引き剥がそうとする。しかし、男から放たれた蹴りによって、あつという間に吹っ飛ばされてしまう。起き上がれない。重症を負ったようだ。

ダン。突然銃声が響いた。

中にいたスキンヘッドのミシュリアーゼ家の護衛が撃ったのだ。

「ケイトお嬢様。お下がりにください」

ケイトは、冷静に変わっていく世界を注視していた。

「ヴォーダル。何なの？革命でもおこったというのかしら。町の人

が私に関わりを持つとするなんて」

「お嬢様。そんな他人事ではいけません。どうやら……まずい状況のようです」

撃たれた男は立ち上がった。護衛のヴォーダルは男の左胸から確かに血が滲んでいることを確認して、もう一度狙いを定める。今度は頭だ。

ダン。ダン。ダン。

男の本来の能力を超えたスピードに、弾があたらない。辺りがざわついている。みんな逃げ出している。積極的に助けようという人間はいない。圧倒的なパワーで男はケイトを目指して向かってくる。「カガヤキノヨンセンシノマツエイメ」

末裔。何のこと。ケイトはさすがにまずいと思ったらしく、街の通りを走り出す。ヴォーダルは数発当てているはずなのに倒れない血まみれの男を啞然と見つめていた。が、男がケイトの逃げた方角へ素早く走り出すのを見て「しまった」と軽く舌打ちすると男の後を追う。しかし追いつけない。そこで大声を出す。

「お嬢様路地裏にお逃げください。建物の間ならば大人は追ってこないはずです」

これを聞いたケイトは急いで狭い路を見つけると滑り込むように入った。

と、そこには3人の少年がすでに路をふさいでいた。

出会い

ケイトは後ろにいる背の高い二人ではなく、前にいる少年が目に入った。

栗色の頭髪をしたその子もこつちをじっと見つめている。

「おい。何者だ。どこのお嬢様だ。ここは使用禁止だぜ。このトッテル様とその仲間以外はな。おい。アレク何みつめあつてんだよ」
3人の少年のうちの一人が言う。アレク。あの子はアレクというのね。

「あつ」

ケイトは自分がどういう状況に置かれているのか思い出し、絶叫する。

「奥に走ってー」

「おい。俺らは誰にも命令される立場にないぜ。ん？なんだ。ありやあー」

追ってきた血まみれの男がトッテルの視界に入る。狭くて入れないようだが、関節をゴキゴキいわせて壁を力で削るようにやってくる。インジードも「逃げたほうがよさそうだな。普通ではない」と言うので、4人は一斉に走り出す。路地裏を抜けるとそこは大きな通りだった。通りを全速力で駆け抜けていく4人を不思議そうに見る大人たち。どうやら怪物はケイトだけを狙っているらしい。

通りのような広い場所ではあつという間に追いつかれるのは目に見えていた。

「おい。速いぜ。あれは…人なのか」

とトッテルが走りながら息を切らしている。

「少なくとも今は人ではないわね」

とケイトも必死に逃げる。

「おれたちなんで一緒に逃げてるんだよ。あれはお前をねらってんじゃないのかよ」

「やっと…やっとなつかんだチャンスなのよ。ピンチはチャンスよ」

「何いってんだ。この女」

「うるさい。この男」

ケイトは興奮気味に走り続ける。これが生きてるってことなのね。人であったものはもうすぐ後ろに迫っていた。

インジータは突如止まって後ろを向いた。ケイトがこけたのだ。無理もない。上品な靴は壊れやすい。立ち止まったインジータは指をはじくような仕草をした。

すると、突如、弾のようなものが、人の形をしたものをつらぬく。「インジータ。ここで『指弾』を使うのはまずいぞ。教会のお膝元だぞ」

「しょうがない。命には代えられない」

だが、やはり、怪物は動き続ける。インジータたちは先頭を走っていたため助けに向かうには間に合わない。

と、ケイトの前に一人の少年が立った。アレクだった。

ラルガッソー

アレクは両手を広げ「怖くないよ。大丈夫。僕は何もしないよ」と語りかける。目は慈愛の光にあふれていた。アレクはこの怪物が哀れに思えてならなかった。

男だったものの凶暴性はその瞬間少し失われたらしかった。アレクの前で立ち止まる。

だがそれもわずかな時間だった。ゆっくりと片手を上にあげるとアレクめがけて振り下ろした。

「アレクーー!!」

トッテルが叫ぶが間に合わない。インジードは懸命にケイトたちのほうへ走る。

ドドドドド。

また銃声がある。今度は間隔の短い射撃音だ。今度、化け物は吹っ飛ばされた。また辺りに血が飛び散る。インジードは銃音のしたほうを振り向いた。

そこには大きな銃を構えた真つ黒な司祭服を着た女がいた。

「下がちなさい。少年。女の子を連れて逃げるのよ」

アレクはケイトの手を握ると走り出す。彼女の手は冷たかった。逃げる途中にアレクは女をきつとにらみつける。

女は肩をすくめて、何故?といった様子だ。助けたはずの少年にならまれたのだから、それもうなずける。

さすがに石工の男は起き上がってこなかった。そして息絶えた。死体を見つめる黒服の女は少し離れたところにいる4人に話しかけた。

「その昔。魔法の力が封じられた理由は知ってるかしら。何を突然というかもしれないけど。この力は魔法の呪いの一種に違いないわ。ああ。自己紹介がまだだったわね。私の名前はラルガッソー。見てのとおり教会の人間よ」

「教会。しかも。武装教徒だな。銃の携帯を許されているとは。しかもかなり高い位だ」

インジードが嫌悪感をむきだしにして吐き捨てるようにいう。

「あらあら。坊やといい。お兄さんといい。命の恩人に対する態度かしらね。ま。いいけどね」

女はタバコを口に加え、火をつけて吸い始めた。

「命を奪うことはなかったのに。何故」

アレクは非難の目でラルガツソを見る。

「もう。こうなつては無理よ。人ではないわ。このケースは私も2、3例知ってるけど、助かったものはいないわ」

「もし、この人の肉親でも同じことがいえますか」

ラルガツソは少しいらした口調でアレクに言い返す。

「そうよ。あたりまえじゃない」

と、そこへヴォーダルが他の召使いをつれてやってきた。

「お嬢様。ご無事でしたか。申し訳ありません。このヴォーダル一生の不覚。何はともあれ無事でよかった。これにこりたらもう、屋敷の外に出ることはお控えください」

ケイトは途端にぶすつとして

「私帰らないわよ。だって、こんなに刺激的な世界がここにはあるんですもの。屋敷の中なんてここに比べたら、地獄みたいところよ」

「お嬢様。またそのような……」

ヴォーダルは閉口している。

「はっはっは。いい根性ね。お嬢様。鬼のヴォーダルと呼ばれた男も形無しね。くっくくく」

とたんにラルガツソが口をはさむ。ヴォーダルは初めてこの女がここにいるのを気づいた。二人は知り合いらしかった。

友達

「ラルガツソー。まだ教会で働いていたのか」

「ははは。ずいぶんな挨拶ね。もつともあんたはもう教会の人間じゃないから、もう上下関係もなにもないけどね」

と軽蔑したように鼻をならした。

インジードとトツテルはこの隙にいつの間にか消えていた。アレクは彼らが、いずれ僕をどこかで置いて住処に帰るだろうことは知っていた。インジードのぶつきらばうな、そしてトツテルの無邪気な優しさを思い出して、彼は目頭が熱くなった。

（ありがとう。二人とも……）

ケイトもそれに気づいたらしい。

「あれね。坊や。アレクっていったつけ。お仲間さんいつちゃったね。ねえ。良かったら家にこない？招待するわよ。ケイト様のお友達第一号としてね。2号と3号は逃げちゃったけどね。いいでしょ？ヴォーダル」

「はあ……。しかし旦那様が何といわれるか。素性のわからない者を……」

「アレクは私の命の恩人よ。それなら文句ないでしょう？ミシユリアーゼ家は恩知らずと罵られてもいいの？」

「あら……。うれしい私も招待してもらえるのかしら」

ラルガツソーが嬉しそうに言う。だが、ケイトとヴォーダルはそんな彼女を無視して話を進める。ついにヴォーダルはアレクを家に上げることを承知した。

「わかりました。お嬢様」

「さあ、行きましょう。アレク」

アレクはじつと死骸を見ると軽く手を合わせた。そしてケイトに「いえ。僕は行かないといけない所があるので、いけません。すいません」

と告げる。彼女はきょんととして「遠慮するんじゃないわよ」といつて笑ってアレクの手を強くひっぱった。「痛い。痛いよ」アレクは声に出すが、格好の遊び相手を見つけたケイトの耳には入らなかった。

かくして、アレクはミシユリアーゼ家の門をくぐることになった。

残されたラルガツソーの独り言。

「なんでよ。私は命の恩人じゃないっていつの？ふー。（たばこをふかす）まあ、少年の後でも追いますか。あの指から放たれたもの。あの少年、『覚醒者』かもしれないからね。お仕事。お仕事。やれやれだわ」

グロッサの苦悩

「流れ弾にあたつて、けが人が4人でました。その他に家が半壊しています。馬車が壊されました。そ…そして、お嬢様はお友達と称して少年を家に招いて一緒に授業を受けておられます」

屋敷の奥のグロッサの執務室。ヴォーダルが直立不動で椅子に座るグロッサの前に立っている。グロッサは机をコツコツと叩き、

「教会にもしつかり、原因究明と補償をさせてやらねばならんな」

「しかし、お嬢様を助けたのは教会のものですが……」

少し狼狽するスキンヘッドの男。だが、すぐに冷静さを取り戻す。ミシユリアーゼ家の当主は強い口調で、

「それでもだ。適当にあしらつてその子供は追い出せ。少し金でも持たせてな。それとケイトに北方の珍しい蝶が手に入ったので贈つておけ。何があるかわからんから今日だけは絶対に外に出すんじゃないぞ」

ヴォーダルは深く一礼して、部屋をあとにする。

一人考え込むグロッサの顔には苦悩のあとがみえる。『覚醒者』か…監獄に閉じ込められることだけは絶対にさせたくない。だからこそ、ケイトを深窓のお嬢様にしてきたのだ。何事も起こらねばいいが。武装枢機卿もいよいよ本格的に動き出すな。難問は山積しているが、大丈夫だ。必ずやりとげてみせる。

屋敷にて

屋敷に戻ったアレクたちはなんとも平和に地理の授業を受けていた。バキラ老といわれる、おじいさんが全ての科目をケイトに教えていた。

「いいですか。お嬢様。おっと、そしてアレク。このアルバニア大陸は5つの町で構成されています。最北端にあるガルシャ・アルメイラ、中央の首都メインドラジラス、芸術の町アルデーヌ、商人の町ゲルドクル、農民の町ランデッサです」

「ガルシャ・アルメイラ……」

とアレクは思わず声をもらす。それを隣の席にいたケイトは聞き逃さなかった。

「どうしたの？アレク？」

「行かなくちゃ。僕行かなくちゃ」

「どこへ??」

「ガルシャ・アルメイラさ」

「そうなのね。なるほど若い少年はこうでなくてはいけないわ。とにかくガルシャ・アルメイラに行きたいのね。なぜか聞くまでもないわね。あなたは生粋の冒険家じつとしていることなんて絶対に無理な話だわ。だからいかになくちゃならないのね」

「いや。そうじゃないよ。話せば長いんだけど……」

「なによ。違うの。まあいいわ。私が連れて行ってあげるわ。友だちってというのは助けあうものよ」

「え??ほんと!!どうやって?」

アレクの顔にほんのりと赤みが戻る。そんなに喜ぶと思ってなかったケイトはばつが悪そうに、

「え???うん……。それは、これから考えるわ」

「そう……」

一気にトーンダウンするアレクの声。

バキラ老が一生懸命口をはさむ。

「いけませんぞ。お嬢様。グロッサ様がお許しになるはずがありません」

「またお父様なのね。あーっもう。いい加減にしてほしいわ。いつもお父様が、お父様が、まったく……もう」

教科書を老人のほうへ放り投げるケイト。と癪癪を起こしかけたところでぴたりと止まる。手を口にあてて、しのび笑いをすると「わかったわよ」と言っ教科書を拾いに行く。

バキラ老は教科書を拾いケイトに渡すが、ケイトはそつと目を逸らして受け取る。（また何かたくらんでいますな。お嬢様。困ったものだ）

その夜、アレクは寢室をあてがわれた。（今日は敷布団もふかふかだ。すごい。やっぱり身分が違うんだなあ。こんな生活してる人もいるのかあ。ああ……だめだ、こんなじゃあ、ガルシャ・アルメイラにたどり着けないや。明日は朝一番に出て行こう。これ以上あの子を巻き込んだらだめだ）そんなことを考えながらアレクは眠りについた。

それぞれの夜

通夜が行われている。家族のすすり泣く声。怪物と化した石工の葬儀だった。だが、遺体さえ棺には入っていない。教会による詳細な検査が行われるらしい。薄暗いろうそくの明かりがぼつんと2本、棺の横に置かれている。町の名家ミシュリアーゼの娘を襲ったことで家族以外の参列者は誰もいない。と、そこに司祭が入ってきた。せつかくの自慢の赤毛も暗いせいか色あせてみえる。

「司祭様ありがとうございます。わざわざきてくださって」

未亡人が司祭に挨拶する。

「何の。この度はお悔やみ申し上げます」

「主人はきつと病気だったんです。せめて人を殺めなかったのが救いです。どうもありがとうございました」

「おそらく邪悪なる呪いの影響です。日夜、呪い解く方法を探しているのですが……。今回も命を奪うしかなかった……。これは教会からのせめてもの補償です」

「といって、これから先、未亡人と子供たちが生きていくのに必要なお金には十分なほどの金貨をそつと婦人の手に握らせる。」

「こんなに……。ありがとうございます。シルバ様」

涙を流し喜ぶ家族たちを残して、シルバは次の慰問先へ向かうため家を出て行った。

その夜ケイトは高熱にうなされていた。いい感じだわ。こうして体の力がわいてくるときに“あの力”がでてくるのよ。さあ、こんな時のために力を操れるようにしてたんだから。まあ、夜が明けるまでに変われば十分だからね。待つてなさいよ。アレク。

部屋の外のドアにもたれかかるようにヴォーダルが座っている。

お嬢様。今度という今度は、外の危険さを、わかってくださるといいのだが。この私がドアの前にずっといれば安心というものだろ

う。いつも、抜け出される時はやはり召使いが甘いからだろう。一度、頑固な若者がいたな。「自分は寝てません。たしかにお嬢様はここからでてません」と来たものだ。ここは3階だ。窓はすでに前科つきだから開かないようにしてある。他にどうやって出る方法があるだろうか？否。ないのだ。

蝶とケイト

夜が明けた。ケイトの身の回りの世話をする女中がドアから中に入っていく。

「キヤー。お嬢様がいません」

「なんだと」

ヴォーダルは信じられない気持ちで

「もつとよく探すんだ。棚はどうだ？ベッドの下は？」

女中はただただ首を振るばかり。

「そんな馬鹿な。くそ。屋敷中を探せ」

ヴォーダルは齒噛みしながら周りに集まってきた召使に命令した。その時ドアの隙間から一匹の蝶がひらひらと外へ飛んでいった。

「あら？お嬢様の蝶が逃げだしたのかしら。せつかくの旦那様からのプレゼントなのに……」

と女中はつぶやいた。「おい。お前も探せ」ヴォーダルから声がかかる。女中も急いで搜索隊に加わった。

「さあさあ。もう行きな」

「ケイトさんよろしく伝えてください。ありがとうございます。お世話になりました」

アレクがちょうど屋敷の門を出ようとしたところだった。一羽の蝶がひらひらと飛んできた。門番は

「なんだ。邪魔な虫だな」

といって、払い落とそうとする。

「やめてください。虫だって懸命に生きているんです」とアレクは門番の足にしがみつく。

「ちつ。わかったよ。じゃあな」

蝶はアレクの周りをくるくると回るとアレクの歩く方向について

くる。

「なんだい。蝶々さん。どうしたの？」

蝶はアレクの肩にそつと止まった。アレクはそつと歩くようにしながら蝶のしたいようにさせてあげた。これからどうしよう。地理的には次はアルデーヌの町を目指すのがいいだろう。アレクは道行く人にアルデーヌ行きの旅客馬車にどこで乗るのか尋ねて回った。そしてようやく馬車の出る駅に到着した。駅といっても一本の柱が申し訳なさそうに立っているだけだった。しかし、発車時間までだいぶあるらしく、駅には誰もいなかった。

ボン！！

音がしたかと思うと、そこにはケイトが立っていた。満面の笑みでスカートの埃を払い、

「アレク。2度もあなたに命を助けられたわね」

と、いたずらっぽく言う。

「え……どういことだい。いったいどこからあらわれたんだい？」

「ふふふ。さっきの蝶どこいったのかしら」

「あ……あれ？どこいったのかなあ？」

「ふふふ。まあいいじゃない。晴れて二人で旅にでれるってわけよ。楽しいじゃない。わくわくするじゃない。さあて、どういう事情か、馬車の中でゆつくりときかせてもらっわよ」

追い詰められるインジダ そしてアルデーヌへ

インジダたちは追い詰められていた。住処はとうに包囲されている。

「ここは完全に包囲されているわ。まだ子供の命までは奪いたくないわ。おとなしく出てきなさい。猶予は10分。それ以上は待てないわよ」

武装枢機卿のラルガツソーが大声で盗賊団に呼びかける。数人の黒の背広の男たちも後ろに控えている。中には防弾チョッキのような硬い服を着込んでいるはずだ。

「インジダ。お前だけは絶対に逃がしてやるからな」

「気持ち嬉しいが、皆は裏道から逃げる。俺は捕まったやつらを助けに行く」

「インジダ。捕まった仲間はどうかないよ。僕らはまだ子供だし、大丈夫さ。それに……この場所だってあいつらが」

「馬鹿野郎！！犯罪者が送られるビジュリアズ監獄は、そんな甘いところじゃない。この場所だってどうやってばれたかまだわからないだろうが」

一喝するインジダ。早く行けと、手で合図する。

皆は盗品をもてるだけもって裏口に向かう。ホテルが近づいて言う。

「こつちのことは任せろ。裏口のあることは数人にしか教えてないから大丈夫だと思う」

「頼んだ。俺の帰るところはしっかり残しておいてくれ」

二人はがっちり握手して、別れた。インジダは窓からサルガツソーたちをじつと見る。

さて、ここから見えるのは6人か……。やつらが俺を殺すつもりなら、無理だろう。だが、生け捕りにしようとしているのならばチャンスはある。インジダは盗んだ馬に飛び乗って、敵の包囲網を

突破しようと駆け出した。

「ここがアルデーヌ……」

アレクは思わずつぶやいた。ランデッサやゲルドクルのような整然とした建物はこの町には皆無だった。奇妙に曲がった屋根。赤、茶、黄、青など、色とりどりにペンキで塗られた家々。くねくねとした道路。通りのあちこちには、みすばらしい服装をした男女の群れが絵を描いたり、楽器を奏でたり、歌ったりしていた。その喧騒たるや、ケイトをして「うるさい町ね」といわしめるには十分であった。そういえば町に入るときの看板に『芸術の町アルデーヌへようこそ！』と書いてあったのを思い出した。ここからは高速の鉄道が首都メインドラジラス、そして、ガルシャ・アルメイラへ向けて伸びているのだった。しかし、この列車に乗れるのはごく一部のお金もちだけだった、

「アレク。歩いていくのよりも何倍、何十倍も列車は速いわよ。とりあえず手持ちにいくらあるの？」

「50ゼルトくらいだよ」

アレクは革袋の中身を確認しながら言う。

二人は列車の駅に到着すると鉄道員がケイトの身なりをみて、愛想よく対応する。

「お嬢様。どちらまでお行きになられますか？親御さんはどちらに？」

「親御さん？私たち二人だけよ」

「なるほど。よろしいです。それでは乗車券はお持ちですか？」

「いくらするの？乗車券」

「私どもはお子様であろつと、犬であろつとお金さえ払ってもらえ

れば乗せますよ。ただし、お金がなくては……」

「で、いくらなの？」

「3万ゼルトです」

「3万!!!!」

ケイトは驚いた。無理もない。ざっと手持ちのお金の600倍だった。

なるほど。これは少々やっかいね。こんなにもお金が必要になるなんて、さすが世界ね。いいじゃないの。わくわくしてきたわ。どうやって、お金を稼ごうかしら。

吟遊詩人

とりあえず二人はこの日、泊まる宿を探すことにした。しかし、子供の二人組みであるため、トラブルを恐れて泊めてくれるところはなかなか見つからなかった。そんな二人がお腹をすかして歩いていると、親子らしき二人が歌っている。

遙かな昔 魔法の時代

神は大陸の人間を従えようと
人との間に5人の子を作った

ケチャラン 雄々しき男

ミネラン 魔法の天才

ラミラリア 癒しの祖

キューゼ 盗賊王

そして神に乗っ取られた人間

ゲムネリア

悲しい戦いが始まる

神は人間を支配しようと考えていた

神と人の子である5兄弟姉妹は人の味方となった

しかし末子ゲムネリアは神の器となり

戦いは始まった

世にいう 魔封大戦である

結果神は敗れ

封じられた

そして、魔法も消えた

大人は美声でそこまで歌いあげると、たちどまって聞いていた二

人を見る。

「やあ。旅人さんかな。わたしは吟遊詩人のビジェネイというものだ。息子のアシドラルクだ。ほら挨拶しなさい」

ビジェネイに促されアシドラルクはふてくされたように「よろしく」と言った。

ケイトは疲れきって小声でぶつぶついつている。アレクも簡単に挨拶をすませると、思い切って聞いてみた。

「あのビジェネイさん。僕ら今日、一晚泊まるところを探しているのですが」

ビジェネイは少し驚いて、

「え？二人だけの旅なのかい。危ないことするねえ。なんなら、うちに泊まっていきなさい」

「え？いいんですか？」

「なあに。気にするな。旅人は大事にするのが吟遊詩人の教えだ」
「ありがとうございます」

アレクは頭を下げた。ケイトは疲れきっているのか何もいわない。ビジェネイの家に着くと、妻のイルトムーンが出迎えた。

「おやおや。小さな旅人ですこと。よろしくね。アシドラルク。お客様の寝床の準備して頂戴。それが終わったら料理の材料を買いにいつてくれるかしら。お嬢さんはその格好は目立つから着替えましょう」

ケイトはぐったりしている。宿屋の主人との口論で体力を奪われたいらしい。小声でぶつぶついいながら、奥の部屋に消えていった。

アレクは居場所がなくまごついていっていると、アシドラルクが2階の寝室から降りてきて、

「ねえ。君。買い物一緒にいつてくれないかい。荷物もちでいいからさ」

と声をかけた。

「うん。手伝います」

二人は市場へ向かった。

道中、アレクは旅の目的地と鉄道の乗車券がいることを話した。

「へえ。そうなのかい。そういえば知っているかい？明日行われる手品大会で優勝すると鉄道の乗車券が4枚もらえるらしいよ。まあ、どうしようもないけどね。ははっ。そうだろ。うちの親父はおとぎ話を歌うしかできないしなあ。僕はもつとちゃんとした仕事につきたいよ。人の役にたつ仕事をね。おつと親父には内緒だよ。あれでいて、自分の仕事に誇りをもっているんだからね。始末に負えないや。君のお父さんは何をしているの？」

「父はいないよ」

「そうかい……」

アレクはさっそく帰って寝室でケイトと二人になると、手品大会のことを話した。

ケイトの能力

案の定ケイトは飛びついた。

「いいじゃない。出ましよう」

「ご飯を食べて元気が出てきたらしい。ケイトは目を輝かせながら言う。

「大会によって生まれる、愛、友情、好敵手。素晴らしい展開ね。なんて面白いの。世界って素晴らしいわね」

「そ・・そうだね」

アレクはケイトのいつもの世界愛、もっとも屋敷の外の世界のことでだが、に軽く相槌をうつて、疑問をぶつけた。

「でも、どうやって優勝するの？」

「ふふふ。私に秘策があるわ。任せておきなさい」

こうして二人は眠りについた。

朝二人はビジエネイさんにお礼を言うと言品大会が行われるという旧闘技場に向かった。この地で昔は様々な見世物が行われていたらしい。もっとも最近では、詩人の歌会などに使われるのみだった。今回は町長の発案で手品大会が開かれることになったらしい。

「エントリーされる方は、番号札をお持ちください！！」

なんと出場者はケイトをいれて10人だった。企画倒れの予感が漂う中、アレクはケイトの助手として、控え室にいた。

そしていよいよケイトたちの番がきた。

ケイトはアレクを連れだって、大舞台に立った。一斉に観客の視線が集まる中、ケイトはアレクの胸に手をあてて、何事か念じるように、ぶつぶつ言いながら、目をつぶる。

「おいおい。子供が何やってくれるっていうんだ。ひっこめー」
様々な野次が飛ぶ。

しかし、その声はいつしか喚声に変わった。

「おいおい。男が二人になったぞ」

「少年が二人に。何のマジックだ」

「いいぞー」

そんな声が当たりを埋め尽くした。そして、そのまま、二人のアレクは一礼して舞台を降りた。

「優勝は……。ケイト&アレクコンビ!!!!!!」

司会役の男が高らかに宣言した。

「やったわ。アレク」

元の姿に戻っていたケイトはアレクと抱き合って喜ぶ。4枚の乗車券がその場で渡されると二人はそそくさと会場をあとにした。

会場から出るとアシドラルクが興奮気味に二人を待っていた。

「びつくりしたよ。二人は魔法使いだったんだね。あれは絶対に手品じゃないに決まっている。ねえ、そうだろう?」

「魔法であろうとなかろうとどっちでもいいのでなくて? 私たちは目的のために手段を選ばないわ」

「是非、僕も一緒に旅に連れて行ってくれないかい? 後生だ。頼むよ」

「アレク? どうする?」

「お父さんとお母さんは心配しないのかい?」

「なーに。飛び出すさ!!」

「いい心意気ね。気に入ったわ。アレク!! 連れて行きましょう」

「僕にはそんな簡単に家を飛び出せる理由がわからないよ」

アレクは怒りを含んだ悲しげな表情で言った。

アレクの怒りなど見たことがなかったケイトは困惑していた。私何か悪いことしたかしら、どうやら世界ってのは思ったより複雑なのね。アシドラルクはしょんぼりしている。

「わかったよ。父と母に相談してくるよ」

そう言つとアシドラルクは家に早足で向かった。

「絶対待っててくれよ」

そういい残して。

アシドラルクの旅立ち

アシドラルクの家では異変が起きていた。ビジェネイの妻イルトムーンが暴れだしたのだ。最初、ビジェネイは一種のヒステリーかと思っていたが、違うらしい。まるで目に正気の色はなかった。イルトムーンは服などが入ったタンスを持ち上げると、ビジェネイ向けて投げつける。と、そこへアシドラルクが帰ってきた。

「母さん。何してるの！！」

いつもの母の姿とは似ても似つかない髪を振り乱し、暴れる姿を見たアシドラルクは叫んだ。

父はタンスの下敷きになっていた。アシドラルクに

「清めの歌を歌うんだ」

と言った。アシドラルクは昔自分の歌を聞いた老人の難病が治ったことを思い出した。だが、あれ以来、父はアシドラルクに強く、その歌を歌うことを禁じていた。それを今になって歌えとは……。戸惑っているアシドラルクに選択の余地はなかった。歌い始める。

麗しの祖 ラミリア

その美しき目に射抜かれた病人たち

皆力あふれるたくましき体に戻り

緑の大地を踏みしめ歩きはじめる

「うおおおお」

それを聞いたイルトムーンの目からは大粒の涙が出てきた。滝が重力に流されるように涙も頬を伝って地面に落ちる。苦しみだすと、口から血が出てきた。舌を噛み切ったのだ。

「母さん！！」

アシドラルクは父をタンスの下から助け出すと、今度は母に駆け寄る。イルトムーンはその場に前のめりに崩れ落ちた。

ビジェネイは意を決した顔つきでアシドラルクに告げた。

「私たち一族はラミリア様の子孫と父、お前の祖父が言っていたのを父さんは思い出したよ。それならば、母さんの突然の変容も納得がいく、これは『呪怨病』に間違いない。決して、子孫にはかからないが、周りの人間に感染するという神の呪いらしい。その闇に魅入られた人間は常人にない力で子孫の命を狙うという。だが、心配するな。私たち一家は幸いなことに癒しの術を持っている。歌だ」

アシドラルクは初めて聞く話に戸惑いながらも、熱心に聞いていた。ふと思いついて、自分にもアレクの母が救えるかもしれないと思った。事情を話すとビジェネイは悲しそうに首をふった。

「呪いの病のもう一つ『呪眠病』だな。神が封じられて眠りについたのは知っているね？その影響を人々が受けるのだよ。つまり、彼が母親を治したければ神を復活させるしかない。だが、それはメインドラジアスの皇帝が許すまい。アレクくんには残念だが、諦めるしかない」

「父さん。僕アレクの手助けがしたい」

ビジェネイは渋い顔をしたが、アシドラルクの燃えるような瞳に心動かされた。危険な旅になるだろう。命を失うかもしれない。だが、困っている旅人を助けるのは家訓だった。

「わかった。いつておいで」

「ありがとう。父さん」

アシドラルクは喜んだ。しかし、彼は心配そうに母の姿を見つめる。

「大丈夫だ。母さんのことは任せろ」

ビジェネイは力強く言うと、アシドラルクの肩を叩いた。少年は豎琴を持って飛び出すと駅に急いだ。

4 人目

一方、駅では騒動が起こっていた。無賃乗車をしようとした子供が見つかったのだ。アレクとケイトは何事だろうと駅のがつしりとした門から小さな背で伸び上がってみてみると、2、3人くらいの駅員に連れられて一人の清潔感のない少年が駅門にやってきた。

「俺はガルシャ・アルメイラに行きたいんだ！！離せ」

なおも抵抗しようとする少年の姿を間近で見た二人は驚いた。向こうもこちらに気づいたらしい。きまり悪そうに大人しくなると駅の門の前で放り出される。彼は立ち上がると、アレクたちに向き直り「よう。久しぶりだな。アレク。それからお嬢さん」

アレクは嬉しくなつて少年に抱きついた。

「インジータ！！」

「よせつ。暑苦しいだろうが」

インジータはアレクを振りほどくと周りの目を気にして駅門の前から少し離れた位置にアレクたちを誘うと早口にまくしたてた。

「実は仲間が教会に捕まってしまったな。教会は浮浪児たちをガルシャ・アルメイラに送るのが常だ。きつとあいつらもあそこに送られたはずだ」

アレクはインジータの姿がとても汚れているのを見て、教会に追われているからだと気づいた。ケイトと一緒にいるのを不思議に思つたらしくインジータはケイトを指指して

「これはどうしたんだ？」

と聞いた。ケイトはこれ呼ばわりされて少々機嫌を損ねたらしかったが、アレクの説明を聞いているインジータを懐かしそうに見ていた。

友達2号と出会えるなんて、ついでるわ。なんてことを考えているらしかった。インジータはアレクたちが4枚の列車の切符を持っていることにとっても喜んだ。

「おお。これさえ、あればガルシャ・アルメイラまでひとつ飛びだぜ。まあ、どうやって手に入れたかは車内でゆっくり聞かせてもらうことにして、俺も連れていってくれないか？」

アレクが快諾するとインジードはアレクの髪をくしゃくしゃとかき回すとうれしそうにした。駅門に向かおうとするインジードにアレクは「実は…」といって、もう一人待っていることを伝えた。インジードは急ぎたいようだったが、アレクがあと少しだけというところを譲った。

そして、時がたった。

アレクたちが駅の門に向かおうとすると、遠くから「待ってくれ」と声が聞こえてきた。アレクたちが振り向くとアシドラルクだった。

息をきらせながら走ってきたアシドラルクは両膝に手をあてて大きく深呼吸するとアレクに

「父さんも許してくれたよ。一緒に行こう」
アレクも頷き返す。

「うん!!」

こうして、4人はガルシャ・アルメイラへ向けて旅立った。運命の齒車は彼らを否応なしに引きつけていく。

迫る包囲網

アレクたちが列車に揺られているころ、アルデーヌの町から電報を打つ者がいた。旧闘技場で手品大会を見ていた教会の牧師である。名前を“聖なる蛇”を意味するジャロボロスと言った。数年前にアルデーヌにやってきてから布教活動や学校を開いたりして地域に貢献してきた彼だったが、今日の手品は不信に思うところがあったのだ。“魔法”の存在はメインドラジアスの神学校で学んだが、実際見るのは初めてだった。いや、あれが魔法かどうかさえ判別がつかなかった。魔法は危険な予兆というのは何度もかつての教師パルモンテから口をすっぱくいわれていたものだから、今回の件を報告しようとしていたのだ。

教会の自室で一人発信機と格闘していたジャロボロスだったが、ようやく説明書を見て、やり方がわかったらしい。「なるほど、ここをこうして」などと言いながら、機械を操作する。なにしろ電報を打つ時はそれほど緊急の時と決められていたのだから。

最新の技術で各町に一つずつ配備されているものなのだ。

アルデーヌの町はランデッサのように町会というものがあって住民たちが自治をしていた。そこにメインドラジアスから派遣されてきた教会員という様子であった。最初は人々の輪にとけこむのに苦労していたジャロボロスであったが、最近は町会のイベントなどに頻繁に招かれるようになった。

芸術が盛んな町で信仰一筋のジャロボロスには物足りなかったが、大きな問題もなくうまくやってきた。それが、今日魔法らしきものを使う少女を見てしまうとは。ジャロボロスの動揺は大きかった。メインドラジアス宛に電報を打ち込む姿は教本を読む姿勢とちつとも変わらなかったが、ひどく疲れを感じた。

『アルデーヌの手品大会で魔法らしきものを使う少女を見た。もしかすると重大な案件かもしれない。彼らは4枚の列車のチケットを

使つて北に向かった』

ここまで打ち込むと、すでに夜になっていた。この頃になって、ジャロボロスは自分のしていることがひどく馬鹿げたことのように思えてきた。

手品大会で手品を披露した異国の大道芸人だったのではないのか？と思い始めたのだ。だが、あんな手品は見たことも聞いたこともない。それは自分の無知ゆえかとも考えた。その証拠にアルデーヌの町長は笑っていたではないか。だが、あんな子供が大人もタネがわからぬ手品を行なうとは考えにくい。いろいろ考えているうちに夕食の用意ができたと妻の呼ぶ声がする。とりあえず電報を打ったのだから自分の役目は果たしたと思い、気になりながらもジャロボロスは食卓についた。

メインドラジアスの会議

ジャロボロスの放った電報により皇帝の住む都市メインドラジアスでは会議が開かれていた。壮麗な装飾に彩られた部屋には数人の男女が集まっている。アルデーヌの巨匠ブラグトナンの絵画、ガルシャ・アルメイラの石工による幻想的な動物の彫刻。過去の遺物と一線を画すものばかりだった。神の文明を否定し、自らの手で一から作り上げた文明を決して過去に逆戻りさせてはならない。会議に参加している者は皆同じ志をもっているらしかった。魔法を使う子供の出現は看過できない問題であった。一人の髭を顔いっぱいに生やした男（髭のせいかな年齢はかなり老けてみえる）が重々しく口を開く。

「皆の者今日集まってもらったのは他でもない。実はかねてからの懸案事項だったゲルドクルの盗賊たちの頭目がまだ捕まっていないことに加えて、アルデーヌでまたもや覚醒者が現れたという情報が入った。さらに悪いことに覚醒者はどうやら合流して鉄道に乗ったらしいのだ。彼らの目的が何かは知らぬ。だが、こちらに向かっている以上見過ごせない問題だ。早急に武装教徒を派遣する所存である」

言い終えると今度は若い不可思議な面を被った男が口を開く。その声はまだ若く、活気に溢れている。

「もちろんヒロウィンシーの復活は防がなければなりません。しかし、何故覚醒者の子供がここに向かっているというだけで私が率いる皇帝親衛隊と同じく殺傷許可を与えられた武装教徒が出るのか理解できません」

しかし、仮面の男の隣から反対意見が出る。落ち着いた教養のある女性だ。年は40代だったが、30代といっても十分通用する外見だ。

「ピンスラー殿。魔法というのは強力な存在です。今はまだ相手が

子供だから良いですが、大人になるにつれて魔法の力は増すと言い伝えられております。私も何も若い子供の命を奪おうとも思いません。ただ、我々が正しい方向に導くことも重要なのではないでしようか？」

ピンスラーと呼ばれた仮面の男は降参とばかりに手を上げる。しかし、髭の男は意見が違うようだ。

「危険だ。生かしておくとか何が起きるかわからぬ」

ピンスラーはつぶやきにも似た男の言葉を聞き逃さなかった。

「危険なものがあるとすれば未だに邪教の灯火が消えぬことですな。奴らは今もガルシャ・アルメイラで隠然たる力をふるっていると聞きますぞ。教皇陛下」

教皇である髭の男は痛い所を突かれたらしく、ピンスラーをにらみつけると諭すような口調で言った。

「あれは力だけで解決できる問題ではない。むしろ子供たちとやつらを接触させないためにも奴らの希望となるであろう子供たちを討つべし」

「ここまで強硬に言われるのは何か別の理由でもあるのではないですか？教皇陛下？」

ピンスラーはなおも言葉を続ける。

「我々に何か隠しておられる？」

教皇は至って冷静に動揺を隠すと一笑に付した。

「そのようなことはありません。よろしい。そこまでいうならば貴君の皇帝親衛隊で子供たちを生けどりにすればよろしい」

「ご理解感謝します。教皇陛下」

ピンスラーはうやうやしくお辞儀をすると部屋を出て、自分の屋敷に戻ると、部下を呼び言った。

「メインドラジアスで列車の検査を行なう。皇帝親衛隊50名を出すぞ」

「ハッ」

部下は急いで命令を伝えるべく走っていった。一人残されたピン

スラーは『なんで、子供相手に50名も出さなければならぬかね。しかし、まあ念には念を入れてということだ』と一人考え、制服を謁見用から戦闘用に変えると屋敷を出た。

列車の中

その頃アレクたち一行は列車に揺られ、真剣な表情で話しあっていた。手品大会の賞品である切符は三等席のものだったが、それでもずいぶん立派で革製の座席に四人はどっかりと腰を下ろしていた。周りの大人たちは何者だろうとばかりに子供たちのみの一団を見つめるが金持ちの良家の子女だろうとばかりに片付けた。実際乗っている者は皆それなりに裕福な人々であつたのだから。ただ、ケイトはともかく他の三人は身なりも悪かつたので、少々疑問を持つものもいたが、皆他人には無関心だつた。

「インジダ。トッテルたちは無事なのかい？」

アレクが心配そうに元盗賊の頭目に聞くと、インジダは悔しそうに三言位悪態をつく、アレクが泣きだしそうな顔で見つめるので仕方なく答えた。

「わからん。ただ捕まつたことは確かだ。約束の場所に現れなかった。俺らの中に内通者がいたんだろう。隠れ家の裏口がばれていたらしい。トッテルは違つとして、タルパムか。それともユジンスキか。くそう。なんだつて俺たちを裏切るような真似なんか」

アレクは優しくインジダをなだめる。目は慈愛に満ち、いたわるような態度に他の二人は常人ならざるモノを感じた。アレクの言いは「裏切り者なんかいない。周りは全て調べ尽くされていたんだよ」というものだったが、インジダにいわせると「あの通路は長いこと使われていなかったのを自分たちが見つけたのだ」と言いはつた。

ケイトといえば、この問答に早々に飽きたらしく、窓の外の移りゆく景色を身を乗り出すばかりに見つめて一人幸福感にひたつていた。アシドラルクがふいに歌いだす。

はるか伝説より時を経た時代

世界を変える戦士たち
遠方の地より北へ向かう

周りの乗客たちが一斉に非難の目を四人に向けたので、アシドラルクはアレクによって演奏を止められた。

「だめだよ！！アシドラルク。列車の中では静かにしなきゃ」

アシドラルクは落ち込むと残念そうにケイトと景色を見始めた。と、思い出したように吟遊詩人の子供はアレクに声をかける。

「僕の父さんがアレクのお母さんの症状は呪眠病ってものらしいっていったよ」

「そうなんだ。眠り病って聞いていたけど、そういう名前もあるんだね。ありがとう。アシドラルク」

満面の笑みをみせるアレクに彼は照れると、また景色を目で追うことを始めた。

このあたりには人は住んでいないらしく、ブナの森やイチビ、ゲンノシヨウコの雑草が僅かに生えた草地が延々と続いていた。旅を始めたばかりの二人にとってその景色は目で追うのも大変だったが華麗な宮殿に勝るとも劣らぬものだったに違いない。そして時が過ぎていった。そして、まもなく終点ガルシャ・アルメイラの途中の都市、首都メインドラジアスに着くと車掌が言って回った。

メインドラジース通過

ついにアレクたちは都まできたのだ。あたりを囲む高い建物の数々を窓から見てアレクたちは驚いた。建物を見て、人々を燃料にして燃え上がる炎が空の頂上を目指して、どんどんと成長していく心持ちがしていたインジータは自分がこの地に帰ってきたのだと不本意ながら郷愁に沈んだ。その様子を見たケイトはインジータが黙っているのを見て、田舎者が建物の群集に驚いているのだと勘違いして、自らも初めてであるにも関わらず、物知り顔で書物で読んだ知識をアシドラルクに教えるのであった。アシドラルクは根が素直であつたし、都会というものに一層の憧れも強かったので、そんなケイトを頼もしくうつとりと景色とともに見つめていた。一方、アレクは少し異変を感じ取っていた。何やら物々しい姿の大人の男たちが、列車の窓を覗きこんでいるのを見たからだ。

「ねえ、インジータ。あれ見てよ。インジータを追ってる人たちかな？」

自分が追われてるとも知らず、インジータに気をつけるように話しかけるが、インジータは感傷に浸ってしまつて、どうしようもない。危機はすぐそこまで迫っていた。

窓から大きな顔が車内を見ていく、アレクはとっさに窓についていた日除けを下ろすと皆に隠れるように指示した。皆は何やら訳もわからずとにかく頭を引つ込めた。すると、外からコツコツと窓を叩く音がする。それとともに大きな声が4人に聞こえてきた。

「おい。開けろ。皇帝親衛隊だ。窓を破るぞ」

アレクたちは声を潜めていると、外では何やら言い争う声が聞こえてきた。

「ちよつとお待ちください。これは高級製のガラスです。壊されてはたまりません」

「駅長。お主、我々を誰だと思っている。皇帝陛下の身边を警護す

る皇帝親衛隊だぞ」

「重々承知致しております。ならば是非中に入って確かめたいいいではないですか」

「なにっ。我々がメインドラジアスを離れられないのを知つての言葉か！」

「ですから何度も申しておりますとおり、列車は私の許可がでるまで動きませんので、安心して乗ってください」

「うむ。そこまで言うならばな。あっピンスラー隊長。子供たちは見当たりません」

靴を踏みならす音がカツンと響いた。敬礼したのだ。ピンスラーはまさか部下たちが、このようないい加減な心構えで任務にあたっているなどと露ほども思わずに「うむ。ご苦労」と言っただけで通り過ぎると次の車両へ歩いていった。残った隊員たちは「どうする？」などと言っただけでささやきあっていたが結局誰も中に入りたがらなかった。閉口した。

アレクたちはじつと身を座席の下に隠すようにして隠れていたが、アシドラルクがついに耐え切れずにくしゃみをしてしまった。

「ヘクシヨン！！！！」

「おい。今子供のくしゃみが聞こえなかったか？」

「子供のかどうかはわからんが確かに聞こえたな」

「おい。駅長。中に入って確かめてくれぬか？」

一刻も早く列車をスタートさせたい駅長は快く「わかりました」と言っただけでさっさと中に入っていた。アレクたちにとって幸運だったのは彼らの切符を確かめていた車掌ではなく、誰が乗っているのかも把握していない駅長が乗ってきたことであつた。座席の下に隠れていた4人に気づかず誰もいないと把握すると日除けを上にあげて、隊員たちに誰もいないでしょう？とばかりに指さすと列車を降りていった。

列車の後方ではピンスラーが副隊長と話している。

「どうやら、この列車には乗っていないようだな」

鼻の大きな副隊長は自らの愛人と待ち合わせしている時間が迫っているのを思い出して、ピンスラーにいい加減に「どうやらそのようであります」と言い添えた。

「列車には乗っていないかったのだろうか。この日の列車はこれが最後だったな？」

ピンスラーは仮面をかぶった顔を傾けながら副隊長のほうに振り返った。副隊長は女には弱い男だったが、普段は職務に忠実な男であつたから、葛藤した。この日3便目の検車だったので隊員たちの士気が下がっていることも知っていた。が、愛人の甘く柔らかな体を思い浮かべて「そのようです」と言ってしまった。ピンスラーにしても、やや注意散漫であつた。何故ならこの日彼は婚約者の約束を破ってきたので、彼女の機嫌をどうやってなおすか心配だったからだ。そして何より、彼らは皇帝の身の回りを警護する職なだけに人を捕まえるのは得意ではなかった。そして、下々の者に聞いてまわるといふ考えもなかったのだ。ピンスラーは駅長に了解の合図を与える、引き上げる準備にかかった。

駅長は嬉しそくに運転士に出発の合図を送った。

こうしてアレクたちはなんとかガルシャ・アルメイラまで向かうことができた。

列車は少しずつ加速していき、やがて暴風のような速さで駅を去った。

ガルシャアルメイラ到着

四人は医療都市ガルシャ・アルメイラについにたどり着いた。駅を出ると、白いペンキで塗られた一戸建ての家が数多く乱立しているのが目についた。今まで旅してきたどの都市とも違う感覚に四人は包まれた。それはまさしく建築物それ自体が白いことで、まるで人の骨を用いて作らせたかのように彼らの目に不気味な色を映すのだった。そして人も白かった。白いマントを全身にぐるりと巻きつける形で外を歩いている人々の群れにも四人は統一された洗練美ではなく、全体主義的な不気味さを感じたのであった。一目で旅人とわかる服装をどうにかしようとインジダは提案した。インジダとアレクの持つているお金が四人の手持ちの全財産であった。合わせて1000ゼルト。子供が持つには十分すぎる金額だった。また四人は帰り道のことなど誰も考えていなかったのだから安易に町の通りで店を出している露天商に捕まって、四人分の白い子供服を着せてもらったのだ。料金は500ゼルト。インジダはあまりにも高すぎるといったが、アレクはとりあえず急がないとまた悪い大人たちに見つかってしまうよ、と言い含めて説得した。そして、500ゼルトは商売上手の露天商の手に渡ったのである。

この男、予想外の高値で相手に服を売りつけることができたものだから、店を閉めてしまった。さらに、まだ夕方だというのに酒場に飲みに出かけた。そこで妙な四人組の子供の話をしたものだからアレクたちにとってはたまらない。あつという間にお金を持った旅人の子供たちの噂がガルシャ・アルメイラの下町に広がってしまった。

この都市、少し妙な作りになっていて、研究棟というものが下町の東側に作られていた。しかし、その規模はもはや棟というレベルのものではなく完全な一個の城といった域にまで達していたのだから

ら、それらを下町の人間はガルシャ城と呼んだ。下町との道には門があり、厳しく門番が立ち、門を監視しているのだ。

しかし、何はともあれ、もう日がくれかけていた。四人は宿を探すと「子供四人」と告げた。宿の主人からすれば旅人らしき子供たちがガルシャ・アルメイラの普段着であるピンチョ（これは先程の白い服のことだ）を着ているのだから、なんとも奇妙である。とりあえずお金は持っているみたいなので、泊めはしたがトラブルに巻き込まなければいいかと考えていた。少したって、どうやら彼らがガルシャ・アルメイラの外からやってきた旅人であることを、料理の材料を買いにいつていた妻から知らされると、いよいよどうしようかと困り果てた。

酒場では豪快にテキーラを飲みながら、子供から500ゼルトをせしめた話をしていた露天商の男がいた。

「黒い肌をした子供がいうんだよ。500ゼルトは高すぎるとね。ちきしょう。さすがに子供でも値下げしないと駄目かと思いい口を開こうとしたとたん、小さな坊主が、ありやあ世間知らずの田舎者に違いないがね、とにかくその子供が何やらこそこそ話してやがるのさ、そして拳句の果てに『500ゼルトで買います』だとさ。まったく近頃の子供ってのは値切ることもできないのかねえ。わしは悲しくなつたよ」

周りの酒飲み仲間がどつと笑う。「なんて悪い大人だよ。あんたは」赤ら顔の太った商人が笑いながら、ちやかす。

と、そこに一人奥の方で酒を飲んでいた女が立ち上がる。どうやら男の声が聞こえたらしい。それもそのはず男の声は酔い加減が増すにつれて大きくなっていったからだ。一直線に男のところまで進むと、手に持っていた冷水を男の顔に勢いよくかけた。露天商の酔った男は「何しやがる」と叫んだ。しかし、次の瞬間足払いを女にくらわされて頭から崩れ落ちた。

「酔っぱらい。もうちょっとその話詳しく聞かせてくれないかね」

女は武装枢機卿のラルガッソーだった。その目の尋常でない冷た

さに男は怯えた目で女を見上げた。

宿屋会議

宿屋では食事の後、一部屋に集まったアレクたちが明日の予定を話している。部屋は二人ずつ二部屋割り当てられ四人はインジータとアレクの部屋にいた。

「手分けして、なんとか高名な医者に眠り病について聞きたいなあ」「宿の主人に事情を話して聞いてみましょうよ」

「俺は仲間たちを助けに行かなきゃならない。明日は別行動をとらしてもらうぜ」

「一人だと危ないよ。ケイトかアシドラルクと一緒に」

「なあに、俺を誰だと思ってる盗賊インジータだぞ。心配するな」「でも……」

「わかったわ。私も一緒に行くわよ。それならアレクも安心でしょう?」

「ありがとう。ケイト」

「僕はどうすればいいのかな?」

「アシドラルクもインジータたちを助けてあげて、僕は一人でいいから」

「おいおい。アレク。本当に大丈夫かよ。聞くところによるとアレクだけ魔法が使えないんだろう?」

「……うん。だからこそ狙われることもないと思うんだ」

「それは、甘くない?世の中をチョコレートみたいに見過ぎよ」

「チョコレートってなに?」

「ものすごく甘い食べ物よ」

「どのくらい?」

「うーんとよ」

「おいおい。話の脱線はそのくらいにしておけ。たしかにアレクの言うことは正しいかもしれないが、ガルシャ・アルメイラ、いや首都の連中は子供一人を放つてはおかないぜ」

「それはどういうこと？」

「俺達盗賊団の仲間が何故ここに送られると思う？」

「わからないよ」

「人体実験さ」

「子供を使ってかい？」

「そうだ。みなし児たちを集めて魔法のことを調べているらしい。
だから俺は飛び出したんだ」

「え？インジダ。なんだい？」

「なんでもない。とにかくわかった。アレク気をつけろよ」
「うん」

四人の話は終わった。明日は忙しくなりそうだ。四人は早々に寝床に入って明日に備えた。

門番ランドルフ

予定通りアレクは一人宿屋を出ると研究棟のある地区に向かった。人に道を尋ねながら歩いたのだが、一人だったので噂の子供とは誰も気づかなかった。

当時、研究棟で研究している医師と考えられていたものは実は科学者という者であって、一般には医者だということになっていた。二つの地区をつなぐものは何もないかに思われた。何故なら、二つの地区はお互い交流することなくそれぞれ機能していたのだから。ただ、下町からただひとつ入ってくるものがあつた。生きた人間だ。それは子供であることもあつたし、そうでない場合もあつた。浮浪児の場合はともかくきちんとした住民もその中には混じっていた。ギャンブルで身を持ち崩したものの、高い家族の医療費を払うためにお金が必要であつたもの、全ての人間が金のためにやってくるのだ。その時、決まって閉まつたままの重い門は開くのであつた。

そんなことはまつたく知らないアレクは門の前までやつとのことです。でたどり着くと、

「すいません。中に入れてください。母が病気なんです。遠いランデッサから来たんです」

と鼻を膨らませて門番に言った。しかし、この門番、わずかばかりの情もないばかりか、武装していて、無理矢理入ろうとする市民には容赦なく銃を向けることで有名であつた。

銃身の長い6発装填式の時代の最先端の銃をもたされていた。もちろん、銃は空に向けて撃つ空砲も多かったが、中にはお金目的に連れてこられた家族を訪ねてわざわざ来て、なかなか引き下がらないものもいたから、そういうときには地面に向けて撃つたりするのだった。ただし、中には一命を賭して家族に会いに来るものもある。その場合は力づくで押し返すのだが、数人ともなると少々骨が折れて、逆に押し返されることもあつた。ただし、門は門番が何らかの

操作をしないと決めてあかないのであった。家族たちは最近では家族会なるものを作って、下町に住みついているらしいと噂で、いつ自分がこの銃を本気で撃たなければならぬときが来るかは門番には恐ろしくもあり、銃の威力を確かめられる好機にも思えた。そんな中、一人の善良そうな少年が、母のために、遠くランデッサからやってきたと聞けば大抵の大人は喜んで親身になって話を聞くなりするだろうに、彼の生まれ持った堅物としての資質は頑強にそれを拒んだ。

「坊や。残念だが、ここは許可を受けた人間しか通せないよ」

「許可はどこでもらうんですか？」

「門の中の偉い人からもらうんだよ」

「それじゃあ通してください」

「だから、許可がないと通せないよ」

この問答を2、3回アレクは繰り返してみたが、どうやら相手はまったく同じことを機械のようにオウム返しするだけで埒があかない。そうこうして、問答しているうちに、太陽はてっぺんに昇った。インジータたちが何やら大勢の大人とやってくる。

門番は先頭に立つ、バルニアス夫人の姿に嫌な顔をした。何よりも門を開けと一番厳しく、そして粘り強く交渉してくるからだ。

「おう。アレク。この人たちも中にいる家族に会いにきたんだと」

インジータが頼もしそうに夫人を見ている。アレクが事情を話すと、バルニアス夫人は痩せこけた頬をなんとか膨らませて、カンカンに怒った。

「ランドルフさん。こんな可哀そうな子まで通してあげないんですの？中にちよつと入って聞いてくるだけでもできませんかね？」

門番のランドルフは半歩後ろに下がって鬱陶しそうに顔の前で手をふる。

「駄目ですよ。決まりは決まりです」

「本当にこの人ときたら頑固なんだから」

バルニアス夫人はこの下町の風俗には染まっていないようで、白

いピンチヨを着ていなかった。みんなでわいわい言ってみるが、門番は意思を変える気配はない。みんなが困っていると、ケイトがアレクに耳打ちする。

「鳥がいれば私が鳥に変身して中に入れるわ」

「ケイト、危険だよ」

「大丈夫よ。心配しないで」

アレクはケイトが世の中の悪意や厳しさをどれほど知っているのか不安に思いながらも（もっともアレクも世間知らずではあったのだが）渋々頼った。

鳥

アシドラルクは歌った。鳥をおびき寄せるために。インジードは走った。鳥を捕まえるために。そして門番ランドルフは啞然とした。彼らの行動が理解できなかったために。

しかし門番には引き続き、アレクたちを無視して今日も夫人連中の抗議の声が聞こえていたから門番はそのことを考えるのをやめた。バルニアス夫人は先頭をきって今日も唾をまき散らしながら大声をあげる。

カラスが一羽見つかったのでアレクたちは追っていく。次第に婦人たちの声は遠のいていく。カラスは黒い翼を悠々と広げ、町の西のほうに飛んでいった。

おお青空をゆく鳥よ

その身を私の元へ手向けたまえ

アシドラルクの歌も効き目がないみたいだ。

「ごめん。どうやら人間以外には効かないみたいだ」

しょぼくれた顔でアシドラルクは残念そうにいう。「よし。じゃあ。俺が」インジードが指から発した銃弾はカラスを射抜いた。「ギャ」鳴き声が聞こえると、カラスは翼をひくひくさせながら道に落ちた。

「やった」

ケイトは叫んだが、アレクの顔は浮かない。

「鳥がかわいそうだよ」

ケイトはアレクの悲しみを知って自分も悲しくなった。アレクのために良かれと思ってやったことなのに。思わず泣きそうになるとアレクがあわてて「大丈夫だよ。後で手当してあげよう。怪我もたいしたことないみたいだ」と気をとりなおす。インジードは肩をすくめて「何が悪かったんだ？」という表情を浮かべる。

さっそくケイトはアレクがつかんだカラスに手をあてると集中す

る。みるみるケイトの体が光って、体に変身していく。

「おお。やった」

インジードとアシドラルクが叫んだ。

カラスは元気そうに2、3歩辺りを駆けまわると、翼を広げて飛び立った。

「待つてよ。ケイト」

アレクはカラスを抱えたまま門の方へ走った。アシドラルクとインジードも続く。

走っている最中にカラスは気を取りなおしたのか怪我をした様子もなく、アレクの手の中で暴れると、そのまま、空中に飛びさった。

侵入

カラスになったケイトは悠々と門番ランドルフと夫人方の上を越えて、ついに研究棟地区に入った。昼ごろだったせいか、外に歩く人たちはいなかった。中に入るとケイトは建物の影で変身を解いた。（はあく。空を飛ぶって変な感覚ね。でも気持ちよかったわ）ケイトは考えると、門のあたりまで行こうとしたが、迷ってしまった。

（困ったわ。アレクたちを中に入れないと行けないのに）

ケイトは思ったが、空から見た景色と地上から見た景色ではまったく違うことを痛切に思い知っただけだった。

すると、向こうから一人のベルトの今にもはち切れそうな太い男がやってきた。

「お？なんだお嬢ちゃん。ここは研究棟だよ。住宅街は向こうだ」

ケイトは見つかって、ドギマギしながら答える。

「門のところに行きたいんです」

「門？何故あんなところへ？まさか脱走でもしてる子供じゃないだろうな？いかんぞ。勝手に抜け出しては」

男は急に冷徹な大人の顔になる、太った脂ぎった顔をてからせながらケイトに近づく。ケイトは気味悪くなつて、2、3歩下がると、正直に話してしまった。

「違います。私は門の向こうから」

男はそれみたことかと言わんばかりに大きな手を出してケイトの腕をつかむ。しかし、ケイトにとってこれはチャンスだった。

（もう一度この男に変身するのよ。ケイト）

しかし、どんどんひきづられていく。なかなか変身できない。やっぱり、この魔法を使うには時間をあけないときついのかと考えたが、なんとか変身するしかない。気持ちを込めると、やっと体が光ってきた。

「ん？」

男は少女の体が光っているのを見て、不思議そうな顔をした。そして、次振り向いた時、自分とそっくりな男が立っているではないか。

「ギャー――」

男は慌てふためき、逃げようとした。そこをケイトは腕をがっちり掴んで、野太い声で「門はどこ？」と聞いた。

「ヒエエエエ。あっちだよ。離してくれ」

男は研究こそしていたが、魔法を見るのは始めてらしかった。そして、魔法を使う子供たちが、ガルシャ・アルメイラにいたということは知らされていなかったのだ。もっとも皇都の皇帝でさえ知らなかったのだから当然といえば当然だった。男が駆けていくとケイトは男の姿のまま門になんとかたどり着いた。中の小さな穴からランドルフを呼ぶ。

「おい。門番」

ランドルフは慌てて夫人方とアレクたち（既にここに着いていた）を無視して、走ってやってくる

「なんでしよう？ドネリーさん」

と、答えた。この男の名前はドネリーというらしかった。ドネリーの格好をしたケイトは持ち前の演技力で「この者たちを皆通せ」と威厳高く言った。しかし、門番は怪しんで、「なぜです？」などと聞いてきたので、怒って「いいから通せ」と叫んだ。これには門番も渋々従うしかなかったようで、何やら携帯用の鏡を持ち出すと、2、3度門の上の高台に合図を送った。するとすぐに門が大きな音をたてて開き始めた。

アレクたちは一斉に駆け込んで思い思いの場所に行こうとする。夫人方はケイトにお礼をいう。ケイトは門が再び閉まると変身をといて、事の次第を説明する。インジードは注意深く

「そうか。ならすぐに警備の人間が来るかもしれないな」

と警戒しながら語った。夫人たちは一団となって、魔法にはとん

と興味もないらしく、彼女たちの夫を探しに向かった。

「僕達も行くぞ」

アレクの合図と共に4人も走りだした。

ラルガッソー再び

研究棟内は不気味な静寂が漂っていた。トッテルたちはどこに？
そして、眠り病の研究をしているところはどこだろうか？

と、そこに古ぼけた建物の一つから2、3人の男女が出てくるのが見えた。話しに夢中でアレクたちには気づかないらしい。

「今回も覚醒者はいなかったか。一体いつになったら覚醒者の研究ができるのかね」

「教会では覚醒者を殺してしまおうという意見もあるそうよ。怖いわね。そんなことしたら科学にとって大きな損失だわ」

「魔法の研究は我々の悲願だからね。あつ。そうだ、さつき武装枢機卿が一人ガルシャ城に入ったと聞いたぞ。何でも覚醒者を追っているとか」

「ほんとに覚醒者なのかね。しかし、覚醒者がなんだって好き好んでこんなところへ来るもんか。これは教会の挑戦ではないか？」

「そう。無粋するものでなくてよ。なんでも覚醒者は昨日やってきた子供たちの親玉らしいわ」

「ほう。インジードが助けに来てくれるとか行ってたが、そのインジードさんかい。はっはっは」

「もしかして、近くにいて私たちの話を聞いてたりしてね」
「まさかだよ。はっはっは」

アレクたちは必死に止めようとする前にインジードは駆け出し
ていた。

バチン。

鋭く頬を叩くような音がした。一人の研究員が叫び声をあげた。

「痛い！！」

「どうした？」

仲間たちも驚く。頬からは血が流れている。周りを見ると、一人の白い服を着た少年が立っている。

「君。誰だね？」

研究者たちは疑問を口にする。

「インジードだー!!」

研究員たちは驚いたように口を開けると、今度は笑みを浮かべた。
「おお。そうかい。わざわざ遠くまでよく来たね。ちよつと体を調べさせてくれないかな？ そうすれば仲間たちと解放してあげるからさ」

「そうそう。私たちに任せれば全てうまくいくわよ」

「おじさんたちを信じなさい」

しかし、インジードは怒ると再び手から弾丸（というには威力がなかったが）を発射した。

「イタタ。痛いよ。こら。何投げてるんだね」

「これが魔法つてやつじゃなくって？ なんと安っぽいけどね」

アレクたちは出ていこうか迷っていた。しかし、インジードを見捨てわけにもいかない出ていこうとしたところ、後ろから大柄な女の影が包んだ。

「坊やたち。冒険ごっこはここまでよ」

ラルガッソーであった。煙草を口にくわえながら、背中に巨大な銃を背負っている。

こちらを振り向いたインジードはラルガッソーに気づくと逃げ出した。

「あら。逃げちゃったわね。あなたたちに協力してあげようと思ったのに」

アレクたちは耳を疑った。ケイトがインジードを目で追いながら聞き返す。

「協力？」

「そうよ。ただし、逃げないでね。あなたたちには殺害命令がでているわ」

「殺すってことですか？？ なんでまた？」

「さあね」

「じゃあ。眠り病に詳しい人に聞きたいんです」

「わかったわ。こっちにいらっしやい」

ラルガツソーは歩き出した。アレクたちは恐る恐るついていった。研究員たちはインジードを追って走り去っていった。アレクたちを背中に従えたラルガツソーは不気味な笑みを顔にはりつけていた。

モンティ老人

「おお。よく来たの。子供たち」

アレクたちを迎えたのは子供くらの大きさの体と異様に発達した大きな頭を持った老人だった。男にしては高い声でアレクたちを見回し声をかける。どうやら、アレクたちを待っていたらしい。顔には満面の笑みをたたえている。ラルガッソーはこの老人の知り合いらしく、入り口のところに立ったまま煙草を近くにあつた灰皿に押しつけて消すと、語りだした。

「彼らが教会から命令が出ている子供たちです。一人逃げてしまいました」

老人は一瞬残念そうにしていたが、小さな肩をあげたり下げたりしながら、「よくきた。よくきた」と声に出して笑った。

アレクは老人のおかしな態度には気づかないで、ついに眠り病に詳しい人が見つかったとばかりに、急いで母の様子をたどたく説明し、最後に老人の名前を尋ねた。

「わしか？わしはベルクルト・モンティという者じゃ。ここで眠り病について研究しておるよ」

と言ったものの、ケイトは研究室には他に誰もおらず目立った機材もないのに気づいた。彼女は怪しんだが、他の研究室を詳しく知らなかったし、本で読んだ知識も正しいかどうかからなかったのだ、黙った。それに、逃げようにも出口はラルガッソーに防がれていてどうしようもなかったのだ。

一方、アシドラルクは辺りを見て不安そうにしている。この天性の詩人にとって、こういう場所は苦手らしかった。

モンティ老人は眠り病について話すかとおもいきや、こんな質問を投げかけてきた。

「昔の伝説を知っておるかね？神々と人間の戦いを？」

アシドラルクはこれについてはよく父のビジェネイから習ってい

たから、諳んじることでもできるくらいよく覚えていた。

「はい。知ってます。この世界の神が人間を支配しようとして、戦った話ですよ？」

「そうじゃ。しかし、少し違うな。神は人間たちを幸福にしようとしたのじゃ。しかし、神と人の間にできた子供たちは反抗した。それが魔封大戦じゃった。神は敗れ、封じられた。しかし、その強大な魔力は世界に影響を及ぼさずにはいられなかったのだ」

話しが逸れたと思ったアレクはモンティに「それが、眠り病とどんな関係があるんですか？」と聞こうとしたが、それよりも早く声を出すものがいた。ケイトだ。

「おかしいわ。モンティさん。私も神が人間を支配しなくなったと聞いたわ」

モンティは厳しい顔つきをしたが、すぐに笑顔に戻ると、

「そういう伝承もあるようだが、正しくないのじゃよ。研究によると神はそのようなこと企んでいなかったことがわかっておる」

と言った。アシドラルクはいろんな説があるものなんだと一種のカルチャーショックを味わった。ケイトは自分を教えたバキラ老に内心毒つきながらも釈然としない思いを抱えていた。

アレクが何か聞きたそうにまごついていると、モンティはその話をきりあげるように次の話に移った。

「まあ、その話はおいとして、眠り病の原因だが、神の魔力のせいなのじゃ。毎年、数十人が眠り病にかかっておるといわれておる」アレクはたまらずモンティ老人に掴みかかった。

「治す。治す方法はないんですか？」

モンティは弱った目で笑うとアレクの肩に手を置いて言った。

「それがあるのじゃよ」

アシドラルクはその時ラルガツソーがぞつとするような笑みを浮かべるのを見た気がした。あまりにも一瞬だったので、自分の勘違いかと思ったほどだった。疑うことを知らない純真な子供たちの中にも不安が少しずつ広がっていった。だが、当のアレクはモンティ

の次の言葉を熱心に待っていた。

3つの条件

「神を復活させることじゃ。そうすれば眠り病の患者は目覚めるといわれておる」

神の復活？アレクは何か自分の及びもしないことに物事が発展していつてると感じた。仲間の顔を見るが二人とも不安そうな顔をしている。

「本当にそうすれば母は良くなるんでしょうか？」

アレクは再度質問した。だが、答えは同じだった。「必ずよくなる」とモンティ老人は笑顔で言うのだった。アレクは先に進むことにした。

「そのためにはどうすればいいんですか？その……神を復活させるには？」

「それなんじゃがね。魔法の秘薬が必要なのじゃ」

「魔法の秘薬？」

聞き返すアレクに老人は必要な物を紙に書き留めた。

そこには3つの物が書かれていた。

「皇帝の杖の珠玉」「魔竜の爪」「神の器」

モンティは説明を始める。

「皇帝の杖はメインドラジアスの皇帝の杖についている宝玉のことだて。魔竜の杖とはガルシャ・アルメイラの北のガジアス山にいる竜の爪をとってこなければならぬ。もう一つの神の器は魔法を使う人間がいればいいのじゃ。これはお主たちは問題なくできているじゃろう？」

「わかりました。いつてきます」

アレクが外に出ようとするラルガツソーが入り口を足で塞ぐ。

「通してください」

アレクが言うと、ラルガツソーは呆れ顔で

「あなたねえ。子供たちだけで、そんなことできるはずないじゃな

い」

「やってみなければわかりません」

アレクは強い口調でラルガツソーに言う。ラルガツソーはため息をつく

「私も一緒にいつてあげるわよ」

と言い、ドアを開けた。アレクたちは確かに子供たちだけで不安な思いがあつたので、この提案は歓迎すべきものに思われた。しかし、何故ラルガツソーは自分たちに協力するのか彼らには見当がつかなかった。アシドラルクが思ったことを口に出す。彼はいつでも率直だ。しかし、ラルガツソーは「個人的事情よ」というのみであった。

ラルガツソーはいつもこうだった。モンティ老人は彼女の辛い過去を思う度に胸が痛んだ。そして、彼女は自らの地位を失う危険にさらされながら子供たちに協力することにしたのだ。皇帝への道は皇帝親衛隊、その他の武装枢機卿など様々な障壁が立ちふさがっている。そして、ガガジアス山に足を踏み入れたものは帰ってきていないという。

モンティ老人は4人を見送ると、文献を見ることに戻り、研究を始めた。

ガガジアス山

ラルガツソーを連れ、3人の子供たちは雲隠れしたインジダを探そうとしたが、徒勞に終わった。そして、異変に気づいた警備兵が皇都からの命令によって増援されていたので、これ以上探すことはできなかった。アレクはとても心配したが、ケイトやアシドラルクはインジダの底意地の頑強さを信じていたものだから、アレクに「インジダはきっと無事だよ」と言っただけで強引に門のところまで連れていった。

ラルガツソーはランドルフの姿を認めると、少しきまり悪そうな顔を見ると門の向こうからランドルフに呼びかけた。彼は呼びかけられると、すぐに門の上の方に合図すると門は開き始めた。門が完全に開いてしまうと門番はラルガツソーを見て、恥ずかしそうにしてこう言った。

「子供たちを捕まえたんですね。さすがラルガツソーさんです。どうですか？ 今度夕食でも一緒に？」

ラルガツソーは苦笑すると煙草を一本火をつけるとふかして、煙をランドルフの顔に吹きつけた。

「あのね。あんた。ちょっと優しくしてやったからってつけあがるんじゃないよ。あんたと私は何でもないんだからね」

ランドルフは煙たそうに咳きこみながら、辛うじて声を搾り出す。「しかし、ここまで私が偉くなれたのもラルガツソーさんのお陰です。それと、あなたは……美人だから」

「やめなよ。子供が聞いてるんだよ。まったく。調子狂うね。じゃあ通らせてもらうよ」

アレクたちは鬼のようなランドルフがラルガツソーには頭が上がないことに驚きながらも、無事門を抜けられてホッとしていた。アレクは目を輝かせてラルガツソーを見る。

「ラルガツソーさん、偉いんですね。残酷な人かと思ってたけど優

しい人なんだ」

笑顔で少年に見つめられて、ラルガツソーはいつもの気怠い感覚を味わいながら「ありがとう」と一言言った。残酷といったのは悪霊に取り憑かれた人間を撃つたことだろうか？

眠り病と並ぶ神の残した負の遺産である悪霊病にかかった人間の始末は武装枢機卿の大事な仕事だったのを思い出した。しかし、今となってはどうでもいいことだった。やっと、彼女は辛く厳しい武装枢機卿の任務から解放されたのだから。

葬り去ってきた死体の山が脳裏をかすめた。だが、アレクたちと一緒にいる限り、病に侵される人が出る可能性はある。その時はもう一度、弾丸を撃ちこまなければなるまい。決意をしながら、ラルガツソーは下町のガガジアス山に通じる道を歩き続けた。

ガガジアス山は大して高い山ではない。しかし、帰ってきたものはいないと伝えられている。ラルガツソーはその噂が教会の作った作り話であることを知っていた。しかし。どのようにして、山に行った人々を帰さないのかは知らなかった。

アシドラルクが歌いながら歩いて行く。

かつてガガジアスには

恐るべき魔竜がいた

神の下僕として役割を果たしていた

しかし、ある時魔竜は神を裏切った

そして、永久に山から出られない体となった

「なんだい？その歌は？」

歩きながらラルガツソーは聞いた。アシドラルクは得意そうに

「吟遊詩人に伝わる歌だよ。さっき思い出したんだ。ガガジアスつてのはガガジアス山のことに違いないよ」

と恐怖など微塵もない心根で楽しく、歩いている。

（なんて、脳天気なんだい。この子供たちは、自分たちが国を敵に回してるって気づいてるのかね。まあ、私は神が復活すればなんでもいいんだけどね）

ラルガツソーはそう一人頭を使うと、だんだんと山が姿を現してきた。

「あれがガガジアス山かあ」

「案外小さいのね」

「霧が出てみたいだ」

山には霧が立ち込めて視界が悪くなっていた。ラルガツソーは背中に背負っていた大樹のような銃を一度地面に降ろすと動作を確かめた。立ち入り禁止の看板が出ている。

「さあ。いくよ」

ラルガツソーが言うと、アレクたちが「おゝ」と掛け声をあげる。（まったく調子の狂う子たちだ）ラルガツソーは緊張感をもう一度取り戻すと、山に足を踏み入れた。一本道の脇には木々が生い茂っている高木がほとんどで、下の地面にはわずかな光で生きながらえる雑草などが生えていた。人が通っていないにしては道は驚く程きれいに続いていた。

メインドラジアスの会議その2

一方、皇都メインドラジアスでは再び会議が開かれていた。皇帝の玉座に向かつて、右の手前から皇帝親衛隊のピンスラー隊長、皇帝の妹君クシヤラ姫、そして教皇ピウスと並んでいた。左に腰かけるのは手前から元老院の代表アラジャ・ツペシュ、まだ子供である皇太子テリウム王子、皇帝の個人顧問であるメラトニア卿が並んでいる。

重厚な雰囲気を取り裂いたのは教皇ピウスの第一声であった。

「やはり、皇帝親衛隊は皇帝陛下の身辺を守らせてこそ能力を発揮する部隊でしたな。それ以外のことをやることを許した私に落ち度があります。皆さんにはこの場を借りてお詫びしたい」

そう言つて、教皇は深々と毛深い顔を下げる。それを苦々しくピンスラー、仮面をかぶった男が見る。

「あの列車に本当に乗っていたかはわかりません。それこそ魔法を使つて空を飛んだのかもしれませんが」

ピンスラーの自己弁護は虚しくクシヤラ姫に一喝される。

「報告では何人も人間が列車に乗っている4人組の子供を見たといっていますよ。あなたが人々を信じないのは結構ですが、自分たちの親衛隊のみ信じるといふのはいささか大人気ないのではないでしょうか？」

「はっ……」

意気消沈するピンスラーを見て、先程から教皇の芝居がかった態度に苛々していたらしい皇太子は「相手は子供であろう。何を大げさな」と言いたげに口をとがらして、自らの趣味である天体観測が会議によつて中断されたのを不快そうな目でクシヤラ姫に訴えた。クシヤラ姫は子供の扱いなど慣れたものといった様子で「シッ」と叱責すると、王子は大人しく姿勢を正すと、傾聴しようとした。

「思つに……」

場の最年長のメラトニア卿がゆつくりと発言を شدした。時に皇帝の代弁者とも揶揄される彼の意見は非常に重い。皆は注意して聞いた。

「魔法というものが、よくわからぬものという理解のもとに全てが一色に染められすぎてしまったのではないか。そもそも、本当に彼らが使っているものが魔法なのかね？」

一同は誰もが、答えを持ち合わせていないので、しばし黙った。しかし、教皇は「もし万が一」という言葉を使って、必死に訴えた。だが、一同は子供たちの命を奪うことに抵抗があった。アラジャ・ツペシュは一言、最後に言った。

「それぞれが独自に動いてはどうか？」

一同は意見がまとまらぬ現状を前にそうせざるをえなかった。

そして、5人の武装枢機卿を持つ、教皇は主張通り、5人に子供たちの殺害命令を与えた。そして、皇帝親衛隊を率いるピンスラーはいつもどおり皇帝の護衛にあたることにし、部屋を出ていった。アラジャ・ツペシュの提案は皆にとって個々人の責任で動くことであるから、責任を取りたくないものは何もしなければいいのだ。しかし、教皇以外の者は皆、子供たちにとって厳しいことになると予想していた。

山の男

曲がりくねった道が続いていた。霧はどんどん濃くなり、視界の自由を奪っていった。アレクたちは必死にお互いの位置を確認しながら、ラルガツソーについていく。本来なら主人公であるはずのアレクたちは、まさに従の存在へと姿を変えていた。しかし、主であるはずのラルガツソーも一本道を延々と進んでいるのに、まったく山頂につかないことを不思議に感じていた。遠くから見たときは見えていたはずの山頂も今ではまったくどちらにあるのかもわからない有様だ。そして、状況はアレクたちも同じであった。霧の前に為す術なしという危機に4人は立ち止まる。

「いつまでたつても着きやしない。変だねえ」

湿った空気で煙草が燃えにくいのを気にして、煙草を控えていたラルガツソーが声を子供たちにかける。

「そうですね。明らかに変だ。まるで同じところをぐるぐる回つてるようだ」

アシドラルクは自分の比喩がなかなか良いものと考えたらしく有頂天になって言った。だが、アレクたちはその心情には気づかず、話しあい続ける。しよげるアシドラルク。ケイトの提案で今度は道に関係なく太陽の方向に向かえば良いのではないかと提案した。すると、一定の方向に行っていることがわかる、と言うのだ。なるほどと4人は納得し、道を無視して進み始めた。しかし、あたりには大木が生い茂っていたし、遠くには狼のような遠吠えが聞こえたので、慎重に進んだ。すると、一軒の家が見えてきた。明かりの姿にほっとした子供たちは駆け寄って入ろうとする。しかし、それをラルガツソーが止めた。

「こんなところに住んでる人間は普通の人間じゃないよ。気をつけな」

だが、アレクが反論する。反論というより、屁理屈なのかもしれ

なかったが、とりあえず言葉に出す勇気を彼は持ち合わせていた。

「でも、聞いてみなければ何もわかりません」

そんなアレクたちにラルガツソーは十分に警戒して他の大人たちに接するように教えた。

「あなたたちねえ。大人の恐ろしさを知らないでしょう」に始まり最後は脅すように「大人は怖いものなのよ」まで珍しく饒舌なのを自分でもびっくりしながらラルガツソーは喋り終えた。ケイトは「ラルガツソーがいるから怖くないのよ」と調子のいいことを言ったが、ラルガツソーはお世辞には無反応だった。

トントン。代表してアレクが戸を叩く。2回目、3回目。しかし、反応がない。誰もいないのだろうか？今にもノックしただけで壊れそうな、その家には誰も住んでいないかに思われた。

「もしもし〜どなたかいませんか〜」

言った瞬間、ガラッとドアが空き中から吊り上がった目をした男が出てきた。

「何の用だ」

野太い声はかすれて、聞き取りづらい程だった。

竜

男の顔には傷があった。醜くえぐれて頬の目の下から顎にかけて続いている。深い傷を思わせた。この男の傷はどうやってできたんだろう？子供たちは好奇心を持った。

ラルガツソーは自分たちが竜の爪を取りにきたことを告げると、男は大笑いしだした。

「何をいつている。この山には竜なんていないよ」

「この山にやってきた人間が帰ってこないと町では言っているだが、どういうわけだい？」

ラルガツソーは重ねて問いただす。

「さあね。大方、山に住む狼にでも食われたんじゃないかね」

「そうかい。邪魔したね」

男との会話はこれで終わった。4人は小屋の前で話しあった。

「竜がいなくてことでしたよ」

「どうしようかねえ」

「困ったわね」

「とにかくもう日が暮れかけているし、ここに泊めてもらいましょうよ」

4人は貧相な家に泊めてもらうことにした。意外にも男はすんなりと泊めてくれた。

食事は山で採れた山菜と、何かの肉を茹でたスープだった。あまりの美味しさにアレクたちは腹いっぱい食べた。疲れが出たのか、4人はそのまま眠ってしまった。

男は外に出ていった。

しばらくすると、ドスンドスンと足音が聞こえてきた。さつと戸が開くと、暗闇の中から光る目が現われた。その目を持つものは男と何か話しているらしかった。

「ヨクヤツタ。コノゴロ人間ニウエテイタトコロダツタ」

「はい。ありがとうございます。いつになったら子供を返してもらえるのでしょうか？」

「アト50人ワタシニクワセテカラダ」

男のため息が聞こえる。目はそういうと、ポタポタと液体を垂らしながらアレクたちに迫った。

その時、ラルガッソーが飛び起きた。銃を持つと、弾丸を放つ。
ドドドドド。

しかし、弾丸を受けてもカンカンと音がするだけで目の主はこちらに進んでくる。

銃声で起きたアレクたちはギロリと睨む二つの目に今にも逃げ出さなばかりであったが、入り口は目が塞いでいる。アレクたちは次第に家の片隅に追いやられていった。目に慣れてくると、目の正体は巨大なトカゲであることがわかった。

「竜よ！！！！」

ケイトが叫んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9306x/>

輝きの戦士たち

2011年12月1日22時53分発行